

笑を世界に求むるの耻辱に甘んぜねばならぬ。獨り選舉民ばかりではなく、被選舉者も亦た其の進退を節義と共にし、常に公道に據るべきは勿論で、敢て或は陋劣醜惡の行爲なきを誓はねばならぬ。更に言論の慎むべくして、演説に文章に何れも公德を敗るが如きことなきを誠めねばならぬ。言ふ迄もなく吾等日本國民は、法律の定むる範圍内に於て言論の自由を有し、著作、印行、集會、結社等も亦た自由を得てゐるが、其の自由を濫縦と混同する者なきや否や甚だ疑はしいのである。若し之を混同する時は不測の危害を國家公衆に及ぼし、失言暴言過言激語の爲めに、口は禍の門となつて、自から求めて社會より葬り去らるゝことがある。されば『過ぎたるは及ばざりけりかり

その言葉もあだに散らさざらなむ』との心を心として、一言一句と雖も禍福の岐るゝ所なるを考へ、慎重に慎重を加ふべきものである。之を個人の日常應對に見ても、駁辯冗舌にして無益の言辭を弄するよりは、寡言にして慎重なるの遙かに尊敬を拂ふに値するものがある。されば緊切なる一語は無益の萬言に勝れるは言ふ迄もなく、多辯にして不實行なるの罪惡に對して、寡言にして實行するの美德たるは勿論である。個人が日常に於ける言語の慎むべきこと斯の如く大切なる以上は、社會公衆に對する言論説議に於て、更に幾倍の慎重を加へねばならぬ譯であるから、公會に臨みて演説し、新聞雜誌に依りて論議を試み、或は人情を小説に寫し、又は政務を議場に論ずるに當つても、

常に責任を重んじて言筆を下し、國家社會の利害禍福に鑑みて放論暴説を誡むべく、殊に事外交に關する論議の如きは、一句の失言直に國家の威信を左右することもあるから、深く注意を拂はねばならぬ。然り言論は之を爲す者の自から慎むべきは勿論であるが、社會公衆も亦た決して無責任たることは出来ない。若し或は風俗を紊し、惡習を誘發し、治安を妨害し、若くは危險思想を挑發せしむるが如き言論を爲す者ある時は、之れが監督者たる社會公衆は、國家の處罰に先じて早く制裁を加ふるの覺悟がなくてはならぬ。

元來日本人の缺點として公德心の甚だ乏しいのは耻づべきことである。之れは從來の社會狀態が然らしめたので、日本人の本性が公德心を

缺くべく出来てゐるのではないから、漸次其の光輝を發つべきは疑ふに足らぬ。鎌倉以前の時代は遠きに過ぐるから此處には省略するとして、鎌倉以後の社會狀態は何うであるかと言ふに、明治維新迄は武家跳梁の世の中で、武家に非ざる者は人に非ざるが如き奇觀を呈し、壓制に加ふるに壓制を以てし、階級の弊害殆んど其極に達し、良民の生命財産は風前の燈火よりも尙ほ危く、恐怖憂悞の念常に絶ゆる時なく、之れが爲めに自己を守るの計に急にして、多く力を社會公衆の爲めに盡すの違なく、加ふるに階級制度の習癖として社交の範圍甚だ狭く、且つ交通の不便と共に彼我互に接するの機會に乏しくして、群雄割據の狀態は一般國民をして又た之れに掣肘せらるゝの餘儀なきも

のあらしめ、金城鐵壁と恃める山河の固めは、従つて其の地方の人民を籠居せしむるに至り、而かも徳川幕府の鎖國政策は海外との交通を遮断して、益々因循姑息の悪習を助長せしめたのであるから、鎌倉開府以後明治維新に至るまで凡そ七百年の間に於て、未だ曾て我が國民の公德心を養成せしむるの機會なく、又た公德心を發揮すべき必要の場合も殆んど之れありしを認め得ざる次第で、社交の範圍益々廣きに從ひて益々發達すべき公德心、社交の頻繁なるに從ひて益々發揮せらるべき公德心が、殆んど七百年來社交なるものを念頭に置かざりし國民、又た之を念頭に置くの必要なからしめたる社會に於て、何うして發達せらるるの道理があらう、其の發達を促し始めたのは漸く明治以

來のことで、而かも特に『公德の必要』として論じ始められたのは僅に此處十七八年來の短時日で、我輩の知れる範圍に於ては、明治三十二年の春、法學博士穗積陳重氏に依つて公德の必要を我輩に説明せられたのが始めであつて、世間の言論界に此の説の現はれたのは尙ほ夫れよりも後の事であつた。斯う言ふ譯であるから、日本人には未だ公德心に就ての充分なる觀念が徹底してゐないと言へば言はれる有様で、儲てこそ缺點として公德心に乏しいのは又た已むを得ざる次第である。卑近な例を擧げて見ると、公園の樹木を折つたり、公共物を汚損したり、汽車電車の中で他人の坐席を塞げたりなどするのも、公德心に乏しい證據である。社交と公德心との關係に思ひ至るの時、吾等日本人

の現状は未だ社交に於て發達せず従つて公德心の缺乏を感せずには居られないのである。

世には社交術に長じた人と長じない人とがあつて、彼の人は社交が上手であるとか、此の人は社交が下手であるとかの批評を聞くのであるが、夫れは交際振りの上手下手を言ふので、社交上の本義たる精神を言ふのではない。社交に尙ぶ所は其の精神にあるので、其の形式に據るのでないから、交際振りは下手でも精神さへ完全に透徹すれば、一見舊知の感がするものである。之に反して精神に至誠なくして唯だ交際振りの巧な者には直ぐ飽きが來て慊氣が起るものである。即ち其の交際は精神的でないから永續せぬのである。若し永續するとすれば夫

れは單に皮相の交際で、心から打ち解けての交際ではない。若し心から打ち解けての交際でなくとも、唯だ表面の辭禮のみを以て満足するものなら、其處に社交術なるものも必要であらう。既に社交の術と言ふ以上は、社交の方法手段の事であるから、手段方法さへ巧みならば精神の如何は論ずる所でない事になる。果して然らば人間は社交的動物であると言ふ意味は、人間の人間たる靈異の精神を没却して、唯だ形式のみを尙ぶ所の無價値のものたるに過ぎないことになる。斯くても世人は其の無價値に満足するのであらうか。吾等は社交術なる不快な詞を取り除いて、萬人と共に精神的に交際を結ぶのが共同生活の本義であらうと思ふのである。

更に考ふるに、人々の性情には多少の相違があり、其の稟資も亦た同一でないから、之れに接し之れに交はるには頗る困難で、其處に社交上の手段方法を要すると言ふ者もあらう。併し其の手段方法は彼我の精神をして如何なる點にまで相感應せしめるであらうかは甚だ疑問である。何が故に世人は形式的の淺薄なる術策を取つて、至大至高なる至誠の精神を披瀝するに勉めないものであらうか。我にして人に接するに至誠を以てし同情を以てするならば、人も亦た我の至誠に感應し、脈々として兩者の心底に相通する所の一路を見出すであらう。此に於て一見舊知の感を爲し、肝膽相照らすに至るのである。是れぞ社交の要訣でなうて何であらう。固より彼我互に長短があるから、至誠を以

て接するの間に、我の餘れる所を以て彼の短を補ひ其の長を助け、彼の餘れる所を以て、我の短を補ひ長を助くるに於ては、實に社交の上乗なるもの又た何等の遺憾なしと言ふべきである。要するに互に至誠を以て感應してこそ、春風駘蕩堅氷を解き去り、花咲き鳥歌ふの妙境に到達することが出来るのである。斯くてこそ社會の共同生活の本義を徹底し、處世の要道を極め得たりと言ふべきである。至誠は社交上の要訣で、又た處世の要道たるは勿論であるが、古來英雄偉人が克く人心を收攬すと言はれてゐるのは何う言ふ譯であるか、將た又た如何にして人心を收攬し得るのであるか、其の收攬と言ふことは英雄偉人の方面よりの事か、或は世人の方面より歸服するの謂で

あるか。凡そ常人は他人の短所を見るに傾き、他人の長所を逸し易いのであるから、人の長所を言はずして其の短所を數へ、斯くて自己を高しとし、他を低しとし、社交の圓滿は之れが爲めに傷けられるのであるが、英雄偉人に至つては決して他人の短を言はず、其の長を採つて事に當らしめるから、人皆之れに服するのである。即ち西郷南洲が『人材を採用するに當り、君子小人の辯若し酷に過ぐれば却て争を引起す。開闢以來、世上一般、十に七八は皆是れ小人なり。故に能く小人の情を察し、其の長所を取り、之を小職に用ひ、其の材藝を盡さしむるを可とす』と言つてゐる所などは、其の度量を寛大にし、能く他の短所を容れて餘裕綽々たるものあるを見るのである。假令小人た

りとも何處かには其の長所があるもので、之を用ふるに其の長所を以てすれば、愚者にも必ず一得がある。英雄偉人は常に此の點に着眼してゐるから、何人も之れに心服するので、一面から見れば英雄偉人が求めて人心を收攬するかの如く觀せらるるも、實は人心の自からなる歸服であるのである。然るに世には己れを知らざる者があつて、策略を用ひて人を籠絡し、詐謀に依つて事を成さんとし、彼の英雄の人心收攬に擬らひて、鳥許がましくも鵜を真似る鳥の身の程知らぬ痴漢もあるが、世間では之を策士と稱して其の手腕を褒め立てるなどは不埒千萬の次第で南洲翁は之を誠めて言ふやう『事大小となく正直を踏み、至誠を推し、一事の

詐謀を用ゆべからず。人多くは事の差支ゆる時に臨みてや、詐略を用ゐて一旦其の差支を通せば、時宜次第工夫の出来る様に思惟すれども策略の煩ひ必ず生じ、事竟に敗るるに至るべし。正道を以て之れを行へば、目前には迂遠に似たるものあれども、先きに至れば却て早きものあり」と。又た言ふ、「人を籠絡して陰に事を謀る者は、假令其の事を成し得るとも、慧眼を以て之を見れば、醜状まことに著し。人に推すに公平至誠を以てせよ、公平ならざれば英雄の心は決して之を攪らねざるなり」と。洵に此の言の通りで、權謀術策を用ひて一時を籠絡すればとて、永久に之を全うすることの有り得べからざるは勿論で、到底至誠公道に依るの至善至美にして、人をして衷心より感應せしむ

るの偉大なる力に及ぶものはないのである。既に偉人は他の短を言はずして其の長を容るるの寛大なる度量を有つてゐることを述べたが、吾等も亦た常に此の雅量を有たねばならぬと同時に、他より受くる所の毀譽褒貶に惑はざる丈の大度を養うて置きたいものである。佐久間象山が「人已れを譽むるも、己れに於て何をか加へん。若し譽れによりて自から怠らば、則ち反りて損す。人已れを毀るも、己れに於て何をか損せん。若し毀によりて自から強くせば、則ち反りて益せん」と言へるが如く、毀譽褒貶は人にあつて、之れが取捨は我にあるのであるから、人にあるものは人の自由に任せて意とするに足らず、我にあるの取捨は我が心に任せて取るべきは取るべく

捨つべきは捨つべく、一々褒貶の爲めに心氣を轉變し、拘泥偏執して活殺の自在を失へば、到底紛糾せる社會に於て社交の圓滿を見ることは難いのである。

更に社交上の一要件とするものは其の容儀と言辭である。元來禮儀作法は形式に流れ易いものではあるが、形は實の賓で、其の精神の端正は其の形にも亦た端正に現はれるものであるから、假令形式にもせよ内心に眞實を有する外形の形式は、決して虚禮でもなく虚儀でもない唯だ内心に虚にして徒らに外形を粧ふ者をこそ誠むべきである。されば儀容の端正は其の内心の端正を表はして奥床しく、端正なる儀容に對すれば、何人も自から其の襟を正すの心持になるものである。若し

夫れ亂髮にして髭蓬々、敝衣垢面、異臭鼻を衝くが如きに至つては、これに對する者の不快の念は勿論であるが、斯の如きは無禮の極、到底社交場裡の人ではないのである。其の言辭に至つても簡にして要を得るを第一とし、冗舌駄辯を誠むべきと共に、又た沈黙無言の偏疾にも陥らざらんことを要する。畢竟するに吾等の言々句々皆赤誠より出で、常に同情の念を失はず、相對し相接するの間、春風の和煦を含み人の言を容れ我の意を徹し、去るべきの短を去り、探るべきの長を探り、一路相通じ、一致相和し、至誠相交はり、肝膽相照らす所、始めて社交の眞義を徹底し、共同生活の神髓を得るのである。是れ即ち世に處するの本義である。



### 六 同化作用の常識

北海の熊は雪を褥として其の身を純白の色に飾り、野山の兎は草色に身を包みて其の生存に適せしめ、青葉の蔭に宿る蛙は同じ葉色に其の身を保護するなど、自然の同化は求めずして彼等の本能を作つてゐる。是れぞ適者生存の理法に依るのであつて、其の保護色は即ち適者たらしむるが爲めの必然の同化であるが、吾等人類の間にも亦た此の同化作用が行はれて、其處に社會の圓滿一致と協同和合を實現し、斯くて共同生活の幸福安寧を全からしむるのである。唯だ人類が他の動物に異なる所は、求めずして自然の同化に依るの外、更に求めて人為の

同化に依り、長短相補ふて其の宜しきを得るの美點にある。是れ即ち常識の判断に依り、甲乙互に較覈して取捨を誤らず、以て其の境遇の適者たるを期するにあるから、人為の同化は常識に待ち、常識の力は能く人をして同化せしむる所以である。學生に學生の氣風があり、宗教家に宗教家らしい所があり、學者に學者らしい所があり、官吏に官吏風があるのは、皆其の人為的同化である。商家の主婦は商家の主婦らしく、農家の妻女は農家の妻女らしく、貴顯富豪の奥様は其の奥様らしき所に價值があるので、人為的同化作用の必要は即ち茲に存する譯である。若し學者の奥様が其の學者たる家庭に同化せずして山奥の樵婦のやうであり、農家殊に小作人たる耕婦、或は官衙の使丁の妻

女、工場の織婦などが、恰も學者の奥様然たり、富豪の令嬢然たるやうでは、其の境遇に適せる家庭を作ることとは出来ない。昔から家風に合はぬと言ふ理由で離縁の行はるゝのは、即ち同化すると同化せざるに依るからである。されば人類社會に於ては人為的同化作用の必要があつて、其の作用が發達せる常識の力に待ち常識の發達は又た其の同化作用に待つことの當然なるは論を待たぬのである。

此に於て社會の共同生活なるものは、採長補短の同化力に依つて其の圓滿を期しつゝあるのであるから、其の社會の基礎たる家庭に於て同化作用が又た如何に大切であるかは他言を待たぬ譯である。元來父祖の性格が其の子孫に遺傳して子孫の性格を作ると言ふことは生物

進化の大法であるが、其の遺傳は即ち父祖の性格の同化力である。遺傳は過去の同化力に依るものであるが、現在の同化力に依るものは即ち感化である。遺傳は同一血族の間に行はれ、感化は血族の異同を問はず過去現在未來を通じて行はるゝものである。其の感化も其の遺傳も之を總括して同化と言はねばならぬ。併し此の遺傳及び感化に依る所の同化は、之を其の遺傳を受け感化を被れる者より見れば、其の父祖若くは他人に依つて同化せられたので、自から之れに同化したのではない。自から之れに同化せんが爲めには其處に模倣の性能を要する。而して吾等人類には何人と雖も此の模倣の性能があるから、自から他に同化するの力を有つてゐる。斯くして人類社會は自他相互の同化に

依つて其の幸福を増進し得るのであるが、其の同化及び被同化、其の感化及び模倣は、必ずしも善事善道のみでなく、又た時に悪化悪染することもあるから、早くも其の動機に當つて常識の正當なる判断に待たねばならぬ。

既に人には模倣の性能があるから、常に兩親に接近せる子女は、其の兩親の氣風と態度とを模倣して、知らず識らずの間に自己の後天的性格を作るものである。之れぞ即ち家庭に於ける同化作用で、此の同化作用は家庭の常態に依るから、善良なる家庭には善良なる同化が行はれ、紊亂せる家庭には厭惡すべき同化の結果を現出する次第である。されば春風堂に滿つる平和の家庭には、資性温良なる子女を出し、又

た忠臣を孝子の門より出し得るのであるが、秋風蕭殺たる家庭の子女には、自から偏僻の性狀あるを免れしめずして、罪人の子には罪人あり、善人の子には善人あるが一般である。時には舜の子不肖なるが如く、親に似ざる鬼子なるものあつて、其の父祖を辱かしむる者もないではないが、斯くの如きは専ら其の子の幼時に於ける母の鞠育薰陶の宜しきを得ざるに基因する場合が甚だ多いのである。

されば古來の英雄偉人は多く賢母の鞠育に依ることは歴史の證明する所で、孟母三遷の例は言ふも更なり、小楠公の忠誠は父正成の感化と共に、其の母の隠れたる薰陶の功多きに依ることは『芳野山若木の花をおほひつゝは、その蔭の高くもあるかな』と言へる歌によりても知

四〇四  
られ、北條時頼の母が天下の執權職たる時頼をして尙ほ質素節約の美風を養はしめんが爲め、破れ障子を切り張りし、英國の大宗教家「ジョン、ウエスレー」をして「予の今日あるは幼時に於ける母の感化なり」と追懐の情に堪へざらしめしが如き、皆賢母の偉大なる同化力を實證するものである。既に賢母であるから又た良妻たるは勿論で、鐵血宰相「ビスマルク」は「予が妻に負ふ所の如何に偉大なるかは之れを口にする能はず」と感謝し、英國の良宰相たりし「グラッドストーン」も亦た、其の配偶者に依りて英國の富を以てするも買ふ能はざる心の慰安を得たり」と言はれてゐる。斯くて生計の難易も其の配偶者の良否に關し、社會的活動の如何も其の配偶者の内助の優劣に依り、

子女の教育感化も實に其の賢母たると否らざるとに關するものであるから、妻の虚榮の爲めに罪惡を犯して囹圄の身となる者もあれば、生計の困難に忙殺せられて他を顧みるの違なき者もあり、妻の爲めに苦しめられて墮落の淵に沈む者もあれば、衣食足らずして禮節を失ふ者もあるのである。  
頼山陽の父に頼杏坪があり、山陽の子に頼三樹があり、進化論の首唱者「ダルウキン」の父に天文學者たる「ジョージ」があり、「ジョージ」の父に博物學者たる「エラスマス」があり、孔子の孫に子思あり伊藤仁齋の子に伊藤東涯あり、楠正成の子に楠正行あり、學界の偉人武門の名將、多くは父子共に其の名を馳するものは、一には遺傳的同

化と、一には家庭の薰陶とに依るのであつて、其の家庭の薰陶には親の及ぼす感化と子の模倣性に依る同化と相待つて、此處に美花を開き良實を結ぶのである。言ふ迄もなく人は家庭に生れ、家庭に長じ、家庭に死し、其の生涯を通じて家庭を離れざる者であるから、若し其の家庭に風波の絶え間もなければ、其の家庭の人の心情にも常に波瀾を生じ、罪惡の家庭には罪惡の人を作る譯である。最近我國に於ける統計の示す所に據れば、謀殺故殺の大重罪犯者の犯罪原因は、怨恨報仇を第一位とし、放蕩嫉妬失愛を第二位とし、家庭の不和、親族間の利害紛争を第三位とし、種々錯雜の原因を第四位とし、姦淫を第五位とし、原因不明を第六位とし、貪欲を第七位としてゐる。即ち家庭の不

和に依る原因が如何に此の大罪と重大の關係があるかを知らるゝと共に、其の第二位たる放蕩嫉妬も亦た家庭の状態より招く所の多きものあるを想到するに於て、益々戦慄せざるを得ない次第であるが、更に自殺者の統計に就て其の原因を尋ねて見るに、過半は精神錯亂の結果で、其の他は病苦、貧苦、薄命の歎きを筆頭に、嫉妬痴情、後悔慚愧、親族不和、商業の損失、負債償却の困難、罪惡の發覺、刑罰の危懼、放蕩淫逸、前途の悲觀、私通妊娠、老衰の苦慮、離縁の悲嘆、結婚の忌避、夫又は子女の不行狀に對する悲嘆、鬱憂煩悶、身體の不具、老耄、父母妻子の死別の嘆、憤怒、縁談の困難と言ふ順序である。尤も此の順序は必ずしも一定のものではないが、其の原因の多くが如何に

家庭の状態に關係せるかを見るであらう。更に青年子弟にして法律上の罪人たる者の其の父母の存否を統計に依つて見るに、父母共に死亡する者、及び父又は母のみ存在する者に於て、多數の犯罪者を出し、父母共に存在する者は比較的少數である。即ち其の子弟より犯罪者を出す程の不良なる家庭でも、尙ほ且つ父母の存否が大なる關係を有してゐることが判かる。又た一般に赤貧者無資産者に罪人多く、幾分の資産ある者は之れに亞ぎ、相當の資産ある者は犯罪者の少數たることも統計の示す所であるから、資産の有無と言ふことに依つて謂ゆる恒産なき者に恒心なきを實證してゐるのである。又た以て家庭の善惡が其の子弟に及ぼす同化力の如何に絶大なるかを窺ふに足るであらう

斯くの如く家庭に同化作用あるが如く、社會にも亦た同化作用がある而して社會の同化作用は家庭に比ぶれば其の範圍も廣く、其の影響も亦た莫大たるは言ふ迄もないが、家庭を離れて社會なく、社會を離れて家庭ある譯もないから、兩者の關鍵する所に又た同化作用の連絡あるを見落してはならぬ。古來英雄は時代を作ると言はれてゐるのは、其の英雄の偉大なる力が其の時代を同化させたのである。或は又た時代が英雄を生むと言はれてゐるのは、其の時代の同化力が結晶して英雄を作つたのである。即ち徳川幕府の末世には勝安芳を生み、明治維新の鴻業は、西郷木戸大久保諸公等の輔弼に待つ所が甚だ多い。とは言へ一般常人と雖も社會の一員たり國家の一民たる以上は、假令英雄

偉人と同等の影響を國家社會に及ぼさずとするも、社會を離れて時勢の外に立つことはないから、多少とも其の時勢に同化を與へ、又た時勢の同化を受け、少くとも社會の一部を感化し、又た社會の氣風に同化するものである。併し常人の通弊として社會の裏面に瀰漫せる惡風に浸染せられ易く、社會の暗黒裡に投げ込まれ易いから、英雄偉人の如く社會を改善するの同化力に乏しいことは免かれざるの數である。斯う言ふ譯であるから、一方には社會を改善すべく努力する者があり一方には社會を腐敗せしむる分子があり、従つて其の改善の努力に同化する者と、其の腐敗の分子に惡化する者とがあつて社會の表面裏面にも、物質的にも精神的にも、混亂紛雜を極つゝあるのであるが、

其の異中に同を求めて之を總括すれば、其處に時代を通じたる一種の潮流があり、社會を通じての一種の氣風がある。之を外觀的に社會の風潮と言ひ、内觀的に時代の精神と言ふのである。故に其の社會が腐敗しつゝあるに當つては、時代の精神も亦た腐敗し、其の風潮は文弱淫靡に流るゝを見るのである。羅馬の末路は其の弊風の大なるもので我が元祿時代の腐敗は其の小なるものであるが、今日の青年子女が虚榮虚飾に趨り、或は墮落の深淵に沈みて尙ほ街奇を求むるが如きは、蓋し弊風の大なるものと言はねばならぬ。其の此處に至つたのは青年子女の罪よりも、却て社會其の物の責任に歸せねばならぬ。即ち社會の表面裏面に於ける腐敗分子が、滔々として此等青年子女を惡化せし

めた結果であつて、又た一人の英雄が早く此處に着眼して之れが改善に努力する者の皆無なりしを反證するに足ると共に、今に於ても亦た一人の英雄の出現を望むこと更に益々痛切なるを感せずには居られないのである。

斯くの如く時代の精神は時代の同化に依つて成り、其の同化の結果は現はれて社會の風潮となるのであるから、歴史の一面は時代精神の推移に伴へる社會風潮の變遷の跡である。換言すれば社會に於ける同化力の経過の跡である。此の経過の跡が善良であれば、其の歴史は光輝あるものである。其の變遷の跡が腐敗の極であれば、其の歴史は恥辱の記録である。吾等は光輝ある歴史を世界に誇るも、恥辱の歴史に依

つて嘲笑を招くことを喜ばぬものである。固より一人の事業でも一人の武功でも、其の大なるものは國家社會の歴史を飾るのである。又た一人の失敗でも一人の罪惡でも、其の大なるものは歴史を汚すのである。何故之を飾り之を汚すか、开は言ふ迄もなく社會を善導し又た社會を惡化する影響の甚大なるものがあるからである。其の善導は同化の善なるもの、其の惡化は同化の惡なるものたるに於て、歴史は即ち善惡同化力の経過の跡なりと言ふ所以である。

斯る善惡同化力の経過の跡は即ち社會變遷の跡であつて、或は盛衰、或は消長、或は興亡、或は存廢の事實を歴史に印してゐるのであるが、其の滅亡破壊されたる國家社會の往事は問はずもがな、苟くも存續し



發達し進歩しつゝある社會に於ては、其の社會的產物を後世に遺傳することとは争はれぬ。現に吾等は祖先の生命の延長であるが如く、後世の子孫は吾等の生命の延長であらねばならぬ。即ち現代は前代の延長で、後代は現代の延長であらねばならぬ。其處に社會的遺傳が繼續し國家的遺傳が存続するから、國體なるものが國家の生命と共に存在し國民精神なるものが前代後代を通じて繼續し、國民道徳なるものが社會道徳と共に過去現在未來を支配する譯である。即ち吾等の言語は祖先の言語である。又た子孫の言語でなければならぬ。吾等の服装、吾等の家屋建築、吾等の文學美術、吾等の風俗習慣、是れ皆祖先の夫れより變遷し來たれるものである。吾等の法律制度、宗教教育、農工通

商に至るまで、亦た皆祖先の夫れより源泉を發してゐる。斯くの如く吾等は社會的遺傳たる過去の同化に依つて今日あるに至り、更に吾等の奮勵努力を以て益々國家社會の進歩發達を計り、幸福安寧を期待して、過去の同化の上に新なる同化を加へて、之を後代に遺すことは、即ち祖先の遺徳を顯彰する所以の現代の本務で、又た規範を子孫に傳ふる所以の吾等の責任と言はねばならぬ。要するに吾等は祖先の同化に依つて生き、子孫は吾等の同化に依つて榮ゆればこそ、其處に社會の發展があり國家の進歩があるのである。此の同化力の強弱は又た風土の關係に依る所が甚だ多い。土地を離れて人なく社會なく、人を離れ社會を離れて土地の價値を認めないか

四一六  
ら、既に人あり社會あるの土地は、自から其の價値の分配を人に及ぼし社會に與へ、山川沼澤江灣海洋の利、禽獸草木五穀魚介の澤、風雨霜雪寒暖温熱の氣、一々直接の影響を與ふると共に、其の風景の美、山紫水明の境域は、精神的に國民を同化せしめて、其處に善良なる國民性の煥發するを見るのである。之を我が日本國民性に徴すれば、其の地理的の如何に絶大なるかを知るに足るのである。即ち之を地勢に見て日本と言へる國號の適切なるは、何人も首肯する所で、昇る朝日に向つて先づ其の雄大崇美なる靈光に接するものは我が日本である。東には太平洋、西には日本海、環らすに洋々たる大瀛の水を以てし、大小の島嶼蜿蜒として連接し、宛然龍蛇天に冲するの勢を以て而

四一七  
かも極東日出の處に位置し、亞細亞大陸を抱擁して世界を睥睨するにも似たる天與の地勢を擅にしてゐるのである。殊に日の神の御子の知しめさるる所で、天津日嗣は天壤と俱に窮りなく、國號の日本は國旗の日章と共に萬邦無比の地勢と國勢とを表昭し、皇徳の廣大無邊なるは天地の際極なきが如く、『いは戸あけし神代おぼえて山の端を出づる朝日の影ぞまばゆき』と詠まれたる其の烈赫なる皇威は、實に豊榮の昇る朝日の如く、世界無二の國體と共に名實兼ね備はること斯くの如きものあるは、天大任を我國に下し給へる所以であるから、吾等の責務の重大なるに想ひ到らば、到底尋常一様の奮發では其の大任を全うすることは覺束ないのである。更に歴史を辿つて見ると此の日本と言

ふ國號の外に豊葦原中國と言ふ名稱もあつた。夫れは四方に海を環らして海岸には蘆葦が茂つてゐたからであるが、人口の増殖と共に次第に開拓し、其の開拓に従つて耕作して見ると、地味は肥沃で五穀が豊熟する所から、千五百秋瑞穂國と言ふ名稱も出来た。又た島嶼の連続してゐる所から大八洲國とも言ひ、良濟佳港に富みて船舶の出入に安全なる所から浦安國とも言ひ、地形の細長い所から細戈千足國とも言はれてゐた。即ち日出の國であり瑞穂國であつて、天の幸慶を我國にのみ集めてゐるやうな感がするのである。

の温和、地味の豊沃は、民生をして其の堵に安んせしめ、斯くて上下和樂し、春風常に國內に満ち、協同一致の實起り、秀麗なる山水には禽鳥舞ひ、明媚なる風光には花卉娟を競ひ、茲に高尚にして優美なる民俗風習が其の芽を萌したのである。且つや漫々茫茫たる海洋には平和の色を浮べて、快活仁愛なる民性を馴致し、巍々たる高嶽峻峯には豪壯の態姿を具へて、堅忍毅烈の性情を養はしめ、銀波を浴びて昇る旭日は富士山嶺の雪に榮え、『富士のねに匂ふ朝日もかすむまで年立つ空の長閑なるかな』の感いよく、深く、長汀曲浦に残る夕日の白沙青松を彩る美はしさは、『夕やけの空の景色を麗はしき線はてなき松原の上』と詠まれたる歌その儘の實景で、公明正大、圓滿和合、至誠仁

慈の情趣は、皆此の風光より湧き出でて理想の一大樂園を形成しつゝ、  
あるを觀るのである。

斯る明媚の山水と純美の風光とを擅にせる我が國民は、自から清淨  
純潔の資性を化育せられ、不淨を忌むの信念鞏固にして、世界無比の  
好潔なる民性を成すに至つたのであるが、此の清淨純潔の心こそ即  
ち天人一貫の至誠となつて現はれたのである。古來我國に於て神を祭  
るには、或は風に祓ひ或は水に禊して、其の心を淨め其の身の汚れを  
濯き落すを常式とし、今も尙ほ神前に拜跪するには、必ず先づ口を漱  
ぎ手を洗ひ、或は齋戒沐浴して白衣を着け、白木綿を櫛に垂れ、其の  
祭器には白木の三寶、白木の机、素焼の土器を用ふるのは、純白無垢

たる至誠の心を表するのである。即ち『鬼神も泣かするものは世の中  
の人の心の誠なりけり』で、至誠にして始めて神明に通じ、神佑を享  
け、萬善の本源之れより發するのであるから、忠孝義烈博愛仁慈は皆  
茲に基づき、勇武にして而かも禮讓に厚く、剛健にして而かも温情を  
含み、以て萬有を包容融和するに足るのである。是れ實に清淨至誠な  
る我が國民性の特色であつて、國體の精華は即ち此の至誠の精神の發  
揮である。

既に至誠であるから天人合一の域にさへ達し得られて神明と相通する  
以上は、人々合一して國民一體となり、億兆其の心を一にすることは  
固より其の分であつて、論より證據の事實は之を歴史に徴して明か

ある。即ち世界あつて此來幾多國家の興廢存亡は應接に違もない有様であるのに、巍然として其の興廢存亡の外に屹立しつゝ萬世一系の皇統を奉戴し、内には億兆の民衆相和して心を一にし、外には敵國の侮を禦ぎて國威を宣揚するものは、我が日本帝國の外に又た何れの國があらう。之を外國に觀れば事實は自から分明である。即ち或は奢侈驕怠の爲めに自滅を招いたものもあり、逆亂革命の爲めに其の王室を顛覆せしめたものもあり、敵國外患の爲めに社稷を失ひて、祖先の祭りさへ全うするに由なく、住み馴し國土は異種族の爲めに占領せられ、不俱戴天の仇敵を君主と仰いで、意氣地なくも屈辱に甘んずるものさへあるのである。然るに我が帝國に於ては何うであるか、建國以來大

義名分を明かにし、君臣は親子の誼に因り、一國は一家の關係を保ち忠孝は其の本を一にし、忠君の愛國とは其の義を同じうし、上下和睦億兆一心、世々其の美を濟しつゝ國體の精華を發揚して、威徳を中外に洽ねからしめ、皇風の及ぶ所は草木も亦た皆靡くを見るのである。是れ固より強弱相食み、殺戮劫奪して建設したる諸他の國家とは其の根本に於て全く異なる所があるからで、従つて『國民は一つ心にまもりけり遠つ皇祖の神の教を』と言はるるやうに同心一體の美を濟しつゝあるからである。故に日本には革命なるものがなく、人種上の争闘なるものもなく、其の純潔至誠の國民精神は實に絶大なる同化力となつて發現せられてゐる譯である。

絶大なる  
同化力を  
見よ

日本化せ  
る儒教

儒教の傳  
來及び沿  
革

此の至誠純潔なる我が國民性は、能く萬有を包容融和する所から、同化の力が最も強大である。同化の力が最も強大であるから、外邦の文物を輸入するに當つても、之を感受し之を咀嚼すること敏速である。先づ其の實例を儒教に於て見ることが出来る。即ち儒教と漢字、此の關係は何うであるか、漢字と漢文、此の關係も何うであるか、日本化する儒教は孝を萬善の本とのみ言はずして、忠を國民教育の基礎としてゐる。日本化せる漢文は一種特異の文體を作しつゝあることは勅撰に成れる日本書紀を見ても判かる。斯くて吾等日本人は儒教を日本化し、漢文を日本化し、又た或る程度まで儒教化せられ、漢文化せられたのであるから、今暫らく儒教の傳來と其の沿革を述べて見やう。そ

もく漢字の傳來は何時の頃からであるか歴史には明かに之を傳へてゐない。或は神功皇后の征韓以前でありとし、或は其の征韓の時でありとし、又は應神天皇の御世の漢學の輸入と同時にあらうとも言はれてゐるが、兎にも角にも日本の上古には文字がなかつたのである。古語拾遺の開卷劈頭にも口々相傳へたと記してあり、現に古事記の全篇は稗田阿禮の記憶のまゝを聞き寫したもので、之を寫すに漢字の音訓を假りて邦語を記したのに徴しても判る。漢字は然う言ふ譯であるが漢學の傳來は明かに應神天皇の御世であることが歴史の證據立てる所である。初め百濟の使臣たる阿直岐が能く經典を讀むので、應神天皇が彼を召して種々の御下問があらせられ、又た博士王仁を百濟から聘

せられたのである。此の王仁が来る時論語十卷と千字文一卷とを献上したのが即ち漢學の傳來の始めで、日本に於ける儒教が此時から起つたのである。其處で皇子の稚郎子が阿直岐と王仁とに就いて修學し、克く其の義に通じ給ふたので、是れぞ我が朝廷にて漢學を講習せられた始めであつた。併し下民には未だ其の修學の及ばなかつたのは勿論である。既にして支那には五胡の亂が始まり、晉帝が僅に支那南部の沿岸を保つてゐたが、之れぞ即ち吳と稱せられたもので、日支兩國の交通は此時から始まつたのである。即ち當時漢主劉宏の末裔で我が日本に歸化せる阿知使臣と言ふのが、勅命を奉じて裁縫の工女を吳の國に求めたのであつた。夫れで吳服と言ふ詞が出来たのである。斯う言

ふ譯合から漢學は益々上流社會の間に行はれるやうになつて、履仲天皇の御世には諸國に史官を置き、出來事やら意見などを記して四方の志を朝廷へ進達せしめられ、雄略天皇の御世には史部を宮中に置いて天皇の内史とせられ、繼體天皇の御世には五經博士の段楊爾と言ふのが百濟から來朝して始めて五經を講じ、漢高安茂と共に分番教授を行ふことになり、欽明天皇の御代には更に醫、易、曆の諸博士を百濟より貢せしめ、之れも亦た五經博士のやうに分番交代して教授せしめたから、文教漸く興り始めて有名なる聖德太子の憲法十七條が漢文で出来たのである。此の漢文は漢字の音訓を假りて日本語を記した古事記の文體のやうなものでなく、實に純漢文であるから、如何に太子

が漢學の素養に深くあらせられたかを拜察することが出来る。殊に其の憲法の第一條に於て、上下和睦し、君臣其の道を失はずとあるのは即ち大義名分を正して億兆一心の美を濟すべきを諭されたものである。又た其の第十七條に萬機公論に決せんとあるのは、實に立憲政體の神髓で、其の明智達識千古に絶するものがある。而して其の他の條々は皆此の二箇條の細別であるが、中にも儒教の精神を以て皇道の一部を表昭せられたものは第四條と第九條で、禮は治國の根元なり信は百善の基なりと言つてある。且つ太子は蘇我馬子と協議して、天皇紀及び國紀等を撰して本邦修史の先鞭を着け給ふたのであるが、惜いことに此等の記録は入鹿の變に際して悉皆焼失して了つた。尤も全部漢文

で記されたものであつたのは勿論で、推古天皇が小野妹子を使節として隋に遣はさるるに當つて太子自から筆を執つて漢文の國書を草し給へるに見ても、當時既に漢學の進歩と儒教の咀嚼とが、克く我が皇道に融合し、早く同化させられたのを察知することが出来る。斯くて隋亡び唐興り、舒明天皇の二年には犬上君御田鍬と藥師惠日とを遣唐使として唐に派遣せられ、唐の太宗李世民も亦た使者を我が國に送り、爾來唐との交通は次第に盛んになり、唐の文物典章が續々我が國に輸入せられ、孝徳天皇は其の大化の新政に於て唐制を參酌せられ、天智天皇の御世の撰定に係れる近江律令、文武天皇の御世に於ける儀制、文武天皇の御世の大寶律令などは、皆唐代の律令を參考し、



以て我が國情民風に酌量せられたものである。斯くて奈良朝時代となつて漢文學は益々盛んになり、國語を記すに漢字の音訓を借用することが行はれて謂ゆる萬葉假名が出来るやうになり、聖武天皇の御世には吉備眞備が始めて片假名四十五字を製して五十音圖を作つた。併し詔勅、布令、其の他一般公式の文書は皆漢文を用ひ、日本書紀の如き國史の編纂も亦た漢文で記され、研學の士と言ふ士は何れも皆漢文を習得しない者が無い。即ち彼の吉備眞備を始めとし、葛野直、粟田真人、太安萬侶、紀清人、淡海三船と言ふやうな人々は、當代に於ける漢文學者の有名な者である。而して其の萬葉假名は唯だ和歌にのみ用ひられ、純萬葉假名でもなく純漢文でもないと言ふものは僅に古事

記と風土記ぐらゐのもので、其の他は皆漢文で記された。斯くて平安朝時代となり、桓武天皇の御世には弘文院が出来、淳和天皇の御世には勸學院が出来、陽成天皇の御世には奨學院が出来ると言ふ有様で、既に明經博士、明法博士、文章博士などがあり、平城天皇の御世には新に紀傳博士を置き、後ち之れを文章博士と合して一とし、是より紀傳、明經、明法、算道を四道の學と唱へたのである。又た修史に於ても日本書紀に倣つて續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄などの六國史が出来て、皆漢文で記された。此の外にも三代格式、古語拾遺、新撰姓氏錄なども皆漢文で、文華秀麗集、菅家文章、都氏文集、經國集、凌雲集などの文集も亦た漢文を以て著

はれ、漢學に長じた者には都良香、菅原道真、紀長谷雄、小野篁などがある。併し平假名の發明以來は、國文の隆盛を來たして漢文を壓し、平安朝の末葉に至つて漸く漢文の衰頽を招いたのであるが、夫でも國文學者は尙ほ漢文學を併せて研究するの必要があつたのである。此の時に當つて源氏平氏の軋轢は保元平治の大亂を助成し、治承の變壽永の亂を経て、平氏の盛勢は權花一朝の夢と化し、鎌倉時代となつて武門政治の端を開き、源家三代に次ぎて北條氏の執權の世となり、王朝時代の大學及び國學は共に廢れ、彼の學院も有名無實となり、漢文學は全く僧侶の間のみ行はれ、詔勅、官符、法文、修史に至るまで皆正格の漢文でなく謂ゆる記録文體と稱せらるる所の一種の變態が

出來て、日本流の漢文が行はれるやうになつた。貞永式目、東鑑などは其の一例である。其の後建武中興を経て南北兩朝の争亂となり、室町幕府の世となつては、文學は全く僧侶の手に歸し、外交文書の如きも皆僧侶をして草せしめ、漢學の振はざることを夥たしく、更に戰亂の時代となつて豪傑割據し、干戈劔戟を事とするに至つては、天下擧げて文學を顧みる者なく、斯て江戸幕府の開始となつたのである。そもく江戸幕府開始の祖たる將軍家康は、戰國の間に人となり、干戈と始終したる武人にも似ず非常に學問を好み、又たく漢籍に通じ僧侶を召して常に經史を講せしめたのである。是より先き明太宗は宋の程朱の經說を科擧に用ひたので、我が僧徒の明に往來する者が其の

學を傳へ、朱註の四書を我が國に講ずる者があるやうになつて、遂に一代の碩儒たる藤原惺窩を出すに至つた。惺窩は參議冷泉爲純の子で、名を肅と言つたが、弘治永祿の頃僧となつて播磨の禪寺に入り、更に儒學に志して肥前に居り、自から藤原惺窩と號したのである。文祿征韓の役、家康の肥前名護屋に陣する時、偶々惺窩の學識を聞きて屢次之を陣中に引見したことがある。其の後惺窩は京都に居て始めて新註の四書五經を講じたが、當時林信勝も亦た京都に居た。信勝は初め建仁寺に學び、更に長崎に行つて宋學を傳習し、再び京都に還つて宋學を講授し道春と號したのである。其處で家康は惺窩と道春との二人を江戸に招いて治國の要道を聞き、爾來武家の禪學は一變して朱氏學に

移り、佛敎は又た敬遠せられて其の形式だけを宗門の名の上に留め、儒敎の經世道德は獨り勢力を天下に振ふに至つたのであるが、固より神道即ち皇道の根本精神を體して、我が國體并に國民性に合致せしめたことは無論であるから、其の儒敎道德も大に日本化せられて日本的儒敎道德となつたのである。元來戰國時代以來、武人は重に佛敎哲理殊に禪學を修得して各自の生活經驗を爲し來つたから、今や茲に新なる眼光を以て儒敎を歡迎し、儒敎の説く所の國家社會道德に對しては興味を以て研究咀嚼し、實踐訓練する間に、自から古來の日本道德と融合し、斯くて戰國殺伐の餘弊を矯めやうとしたのが實に將軍家康の所期であつた。即ち武を和ぐるに文を以てしたのであるから、其處で

江戸城内に富士見寶藏を建て、之れに移すに金澤文庫の書籍を以てし  
後其の寶藏を紅葉山の下に移して紅葉山文庫と稱し、更に活字を作  
つて孔子家語、貞觀政要、群書治要などの寫本を印行した。其の活字  
には木製があり銅製があり、其の銅字は八萬九千八百十四箇で、木製  
は殆んど無數であつた。是に於て文教の勃興と儒學の隆盛とは却つて  
奈良朝時代を凌ぐに至つたのである。  
尋で元祿年間に五代將軍綱吉は林信篤の忍岡邸にある孔子廟を湯島  
臺に移さしめ、其の廟地を昌半坂と改稱し、祭田千石を置いて毎年春  
秋に釋奠を修じ、廟の傍に學舎を建て、信篤等をして書を此處に講せ  
しめ、之を昌平齋と名付けた。即ち德川時代に於ける最高の學府であ

つて、又た全國の文教の中樞である。斯くて信篤に蓄髮結束せしめて  
大學頭に叙し、爾來大學頭を林氏の世襲と定めた。是れよりして諸藩  
の儒者も亦た皆蓄髮し、仍て以て鎌倉末世以來漢學を専有したりし緇  
徒の剃髮の餘風を脱したのであるが、寛永年間には近江聖人の稱ある  
中江藤樹が陽明學を唱へ、其の門人に熊澤蕃山があり、蕃山と同時代  
に宋學を排斥して古學を唱へた伊藤仁齋があり、仁齋の子に東涯があ  
り、又た宋學を固守して神道を兼修した者には山崎闇齋があり、古文  
辭を修めて専ら古文學を唱へた者には荻生徂徠があり、唐宋の學派を  
區別せずして詩文を兼修した者には木下順庵があり、順庵の門人に新  
井白石、室鳩巢、雨森芳州、祇園南海などの學者があつて和漢の學に

通じてゐた。更に儒學を林羅山に受け兵略を北條氏長に學びて有名な者が山鹿素行である。素行の著たる聖教要録には程朱の學を排斥したので、幕府の忌諱に觸れて十年の間赤穂に幽閉せられ、其の教旨は彼の四十七士の義學あるに至らしめた。且つ素行は儒學兵學に長じたのみでなく、又た實に古神道の精髓を極めたから、其の著の中朝事實の如きは讀む者をして自から襟を正さしむるものがある。其の儒學の日本化せる點に於て、頼山陽の日本外史の論文と共に雙壁であるが、此の中朝事實の著は、實に幕府の驕傲にして皇室を敬遠するの傾向あるを憤慨したる結果であるから、素行が赤穂に幽閉されたのは當に聖教要録の罪のみに坐したのではなかつた。斯くて九代將軍家重、十代

將軍家治の世となつては、幕府の權勢は其の極點に達し、加ふるに老中田沼意次、其の子意知と共に秕政相踵ぎ、憂國慷慨の士は茲に勤王論を唱ふるに至つた。即ち竹内式部山縣大貳等が其の先驅者であるが當時式部は京都に居り、闇齋派の學を修めて『儒學神道』と言へる神道化せる儒學を説き、大義名分を明らかにして勤王制幕を主張したので、幕府の忌諱に觸れて重注放に處せられた。又た大貳は甲斐の人であるが、江戸に出て醫業を開き、其の學は和漢を兼ね、且つ最も兵學に長じ、常に大義名分を論じて皇室の式微を慨し、柳子新論を著はして時勢を諷刺すること極めて剴切であつたから、幕府に密告する者が誣ふるに不軌を謀るを以てしたので、幕府は大貳を始めとして其の黨

與を捕へ、大不敬を以て之を論斷し、遂に大貳を死刑に處したのであるが、此の反動として勤王の士が四方に起るやうになつたのである。尋で老中松平定信の寛政改革と共に林家の私塾であつた昌平黌を官學とし、讃岐の儒者柴野栗山、伊豫の儒者尾藤二洲、肥前の儒者古賀精里などを江戸に召し、林大學頭と共に昌平黌の教授たらしめ、大に朱子學を振興して天下異種の學風を匡正することとなつた。之を『異學の禁』と言ふのである。爾來諸藩の間にも陸續として學校が興り、熊本の時習館、萩の明倫館、鹿兒島の造士館、佐賀の弘道館、米澤の興讓館、伊勢の有造館、佐倉の成徳書院、仙臺の養賢堂などが最も有名である。此時に當つて仙臺の人林子平が夙に外國の形勢を察して

邊防の事を憂ひ、海國兵談、三國通覽などを著し、幕府の爲めに兄嘉膳の宅に幽錮せられ、其の著書の刊布を禁じらるゝと共に版木を焚かれたのである。時人は此の子平と高山彦九郎蒲生君平とを寛政の三奇人と稱した。彦九郎は上野の人、皇室の衰微を慨して復興の志を抱き、京都に行つて公卿の間に入出し、西國を巡遊して筑後久留米に自殺したのである。又た君平は下野宇都宮の人、國史を研究して彦九郎と志を共にし、歷朝山陵の修らざるを慨し、諸國を周歴して山陵志を作り、且つ邊防の事を論じたので、危く幕府の嚴罰に處せられんとした所を、林祭酒の陳疏に依つて僅に事なきを得たのである。斯の如く勤王制幕の時運が漸く興るに當つて、一面には儒教の隆盛に

件へる支那崇拜の思想を打破せんが爲め、又た一面には國學國史に據つて國體の精華を發揮せんが爲め、國學の復古を首唱したる下河邊長流が大和の宇陀より現はれた。彼は大阪に出て萬葉集、古今集などを研究し、其の門下に大阪の富豪が甚だ多かつたのである。水戸光圀が其の名を聞いて彼を召したが應じないので、遂に萬葉集の註釋を囑託したのであるが、夫れの出來上らぬ中に歿して了つたのは惜むべき事であつた。此の長流の友人に僧契沖があつて、是れ亦た國學に長じてゐたから、光圀は更に契沖に囑託して萬葉集の註釋を續成せしめたのが即ち萬葉代匠記である。此の外契沖の著書には古事記抄、古語拾遺抄、書紀竟宴頭書などがあつて、其の識見卓絶、古神道の眞髓を明に

して復古學を唱道し、舊弊を一洗したのである。又た契沖と同時に羽倉東麻呂がある、即ち荷田春滿は其の人で、同じく國學の復古を以て自から任とし、能く國史に通じ、殊に神代卷と萬葉集とに於て自得する所があり、且つ律令格式に精通してゐた。世間では之を羽倉學と唱へて大に當時に行はれたものである。其の門人に加茂眞淵があつて、古學古言に通じ和文和歌を善くしたのであるが、學者多くは儒教に心酔して自から我邦を蔑視するの惡風あるのを慨し、國體を明らかにし名分を説き、古事記私記、神代記訓考、催馬樂考、冠辭考、萬葉考などを著した。尋で春滿眞淵と共に世に三大人と稱せられた本居宣長が出た。宣長は伊勢松阪の人、初め京都で堀景山に儒學を學び、之を日

本化したる蘊蓄を提げて支那崇拜を排斥し、書信を以て江戸に居る加茂眞淵に國學の疑義を質し、大に得る所があつて字音言詞の學に秀で殊に其の大著たる古事記傳は、考證精密を極めて博學多識を證明し、馭戎慨言、玉匣、字音假名遣、詞の玉の緒、玉勝間、鈴屋集などの著は枚舉に遑もないが、要するに一切外來の不純なる思想を排斥し、我が古代の事實に據つて純日本的に古道を明かにし、超越的迷信的將た非國家的なる宗教より神道を分離せしめんことを圖つたのである。宣長の後に、出羽の人平田篤胤がある。篤胤は初め醫を學び、年二十にして江戸に出で、宣長の著書を読んで古學に志し、盛んに儒佛を排して神道を主張し、古史成文、開題記、神代御系圖、雲能眞柱、大扶桑考

などを著した。斯る間に露西亞の艦船は屢次我が北邊を窺ひ、幕府は益々海防の急を悟つて文化年間に安房上總下總相模の沿岸に砲臺を築いたのであるが文政年間に至つて英吉利船も亦た屢次相模の浦賀、常陸の大津濱、薩摩の寶島等に來るので、幕府は遂に外船擊攘の令を下し、攘夷の説ますます盛なるの時、水戸齊昭は弘道館を建て、戸田忠敬、藤田東湖等を用ひて文武を奨励し、會澤安は其の著たる新論に於て國體を論辯し勤王論が漸く盛んになつて來た。恰も此の時頼山陽の日本外史が出來上つて、水戸の學者と共に儒流よりして國體を明らかにし、大義名分を正すに至つたのである。是れぞ日本化せる儒學が大に勤王論を鼓吹



するの原動力となつたもので、本居平田大人等の國學よりせる復古神道と相待つて、時運は遂に幕末の大改革を促進し、以て明治維新の起源を開いたのであつた。

斯う言ふ風で儒教が日本化せられて日本流の儒教となつたのであるが、佛教も亦た其の通りで、釋迦牟尼以來三千年、東洋の天地は佛教に依つて開拓せられ、幾億の生靈は其の信仰を此の教旨に繋ぎ、近時に至つて其の教理は東洋哲學の大系統を組織し、泰西の學者をして深奥の思想と幽玄の哲理とに驚倒せしめつゝあるのであるが、之を我國に就て見るに佛教の輸入以來幾多の波瀾を経て多數の宗派に分れ、其の大伽藍其の大堂宇と共に幾百萬の信徒を有し、儀容堂々、外觀整齊、

儼然として一大宗教たるは争ふべからざるも、其の教理は夙く既に日本化せられて日本佛教となり、其の根本たる印度佛教とは體面も實質も全く改變せられたのであるが、之れは神道の大理想を以て現實を支配指導するに當り、佛教は之れが補助たる教義信仰として活動し來れるに依るので、佛教の感化教養の功德は、神道を待つて始めて發現し得られた譯であるから、若し孤獨の佛教即ち印度佛教其の儘としては恐らく我が國民に融合せられなかつたであらう。故に我が國民に融合せんが爲めには自から化して日本的佛教とならざるを得ない。即ち神道化したる佛教として存在せざる限りは到底我が國民に容られないのであつたが、一面より之を觀れば佛教を日本化せしめたる我が國民の

同化力は、實に絶大と言はねばならぬ。今暫らく其の沿革を述べて見やう。

そもく、繼體天皇の御世に南梁の人司馬達等が佛像を奉じて我國に渡來したのが即ち佛教傳來の嚆矢と見るべきものであるが、其の當時に於ては世人は之を異神として尊崇しなかつた。然るに欽明天皇の十三年、百濟王聖明が使を遣はして釋迦佛の像、幡、經論などを献じ、盛んに佛教の功德を稱揚したので、朝廷では之れが採否に就き議論が二派に分れて決しなかつた。其處で天皇は其の佛像を蘇我稻目に賜ひ、稻目は之を拜受して向原寺を建て、天皇も亦た勅して吉野寺を建てさせ給ひて、茲に始めて我國に佛像があり佛寺があることになつた。

併しながら大連の物部尾輿は極力佛教を排斥し、中臣鎌子は尾輿に左祖したので、蘇我氏と物部氏との軋轢は益々助長せらるるに至つた。即ち佛教の採否説は、蘇我物部兩氏の權勢上の軋轢に依つて利用せられたのである。斯る折しも敏達天皇の御世となつて百濟より又た僧尼寺工、佛工を献じ來り、新羅よりも佛像を献じ、更に我が使臣が百濟より佛像を齎し還るなどの爲め、稻目の子なる蘇我馬子が奏請して其の佛像を祀り、僧尼を度し、堂塔を建て、佛教は漸く盛んになつて來たが、恰も此の時疫疾天下に流行して猖獗を極めたので、尾輿の子物部守屋は之を以て佛法の災厄であると極言し、中臣勝海と共に奏請して佛法を禁じ、佛殿も佛像も皆焼き拂つたのであるが、續いて又た

瘡疾が流行し、天皇も之れに悩み給ひ、守屋も其の患に罹つた。其處で蘇我馬子は好機逸すべからずとし、天皇の御惱と疫疾の退散とを佛法、僧の三寶に禱らうとしたのを、勝海は峻拒して之を容れなかつたので、馬子は遂に勝海を殺して僧侶を宮中に入れたのであるが、天皇の御惱は癒えさせられず、三輪君逆に後事を委ねて崩御あらせられた。爾來物部蘇我兩氏の軋轢は益々激甚となり、殺傷誅戮互に行はれた結果、物部氏は守屋を以て滅び、蘇我氏のみ獨り其の專横を極むるに至つたのである。

此時に當つて聖德太子は馬子と共に佛教を興すに努め、用明天皇の御世には四天王寺を難波に建て、崇峻天皇の御世には法興寺を大和に造

り、爾來庶民の僧尼と爲る者多く、従つて法を犯す者があるやうに爲つて来たから、僧正、僧都、法頭などの僧官を置いて僧尼を檢校せしむるに至つた。恰も此の時高麗の曇徴は彩色を製し又た紙及び墨を造つたので、朝廷は畫師を置いて佛像を畫かしめ、彫刻、建築、繪畫等の術は是れよりして發達を促し、太子は更に憲法十七條を定めて、其の第二條に三寶を敬すべきことを宣せられたのである。

斯くて聖武天皇の御世に至つては、天皇親ら深く佛法に歸依し給ひて厚く僧行基を信せられ、寺院の建立、佛像の鑄造、盂蘭盆供養などの開始となり、佛法の信念に基づいて肉食、屠殺、漁獵等の禁令を申ぬると共に、持齋の法を嚴守すべきを命じ、天平年間には諸國に國分寺

を建て、奈良には七大寺があり、東山には大佛の鑄造が起り、大佛堂の高さ十六丈、建術、鑄佛の術は急速の進歩を爲し、本邦美術史中の最大時期を劃すると同時に佛教は隆盛の頂點に達したのである。殊に舒明天皇の御世遣唐使あつて以來、我國の僧侶にして支那に留學する者ますます多きを加へたので、佛教の研究は年を逐ふて愈々進歩するに至つたのである。

斯の如く佛教の隆盛と佛法の傳播とは、遂に神佛の衝突を來すの已むを得ざるに至つたので兩者を調和して佛教の普及を計らんが爲めに、僧最澄及び空海等に依つて本地垂迹説が唱道せられた。即ち神を以て佛の權化である。神は佛法を擁護する所の番神であるとし、神跡の存

する所には必ず佛刹を設け、寺院のある所には又た神を合祀し、謂ゆる兩部神道と稱するものが發生した。即ち神宮寺の如きは其の實例であるが、後には神跡を埋滅して故らに其の地に寺院を建つるが如き弊害を生ずるに至つた。斯くて推古朝以後平安奠都時代に及びては佛教の分派が出来て、三論、成實、法相、華嚴、律、俱舍、天台、眞言の八宗となつたのである。

斯くて藤原氏の攝關時代となりては、諸大寺の僧徒は漸く強暴に赴き殊に南都北嶺たる奈良の興福寺と比叡山の延暦寺の僧徒とが最も亂暴を極め、村上天皇の御世に至つて延暦寺の僧良源は天台座主に補せられて以來、彼は佛法の擁護は兵力に倚るの外なしと唱へ、惡僧を聚め

て武を講せしめ、之を衆徒と號したので、他の諸大寺も亦た皆之れに倣ひ、僧兵之より起り、僧徒の朝廷に嗾訴するもの之より始まり、遂に武人と相軌るの端緒を開くやうになつたのである。更に又た僧徒の間にも確執を生じ、後三條天皇の御世の園城延曆二寺の鬭争、白河天皇の御世に於ける延曆寺僧徒の園城寺の焼打ちなどが夫れである。是に於て朝廷では源義家及び義綱をして禁闕を護衛せしめて僧徒の争擾に備へ、初めて北面藏人を院宮に置くに至り、堀河天皇の御世には延曆寺僧徒は日吉神輿を動座して禁闕に迫り、白河法皇の院政に際しては奈良興福寺の僧徒は春日神木を擁して京師に迫り、亂暴狼藉を働く所から、法皇は遂に檢非違使に命じ源平二氏の兵を分ちて南都北嶺

を拒撃せしめられたので、茲に武人と僧徒の敵視と爲り、僧徒は遂に兵器を帶して京師及び近畿を擾亂し、朝廷は僧徒の帶兵を禁じて、僧徒は其の命を奉せずして益々強暴を加ふるに至つたのである。併しながら朝廷に於ける崇佛は之れが爲めに衰ふることなく、却つて寺院を建て供養を務むることは益々盛んで、白河天皇より鳥羽天皇に至る時代には既に六勝寺の建立があり、僧空也が念佛宗を唱へ出してから百萬遍念佛會が起り、又た最雲法親王が天台座主とならせらるゝなど親王の座主が始まるやうになつた。斯う言ふ有様で、北條氏の執權時代には鎌倉に五山があり、更に王朝時代の八宗の外に融通念佛、専修念佛、法華題目、曹洞禪宗、淨土眞

宗、法華宗、時宗などの教派が盛んに起り、足利時代に至り僧侶は外交の衝に當り、又た外交文書の草案に従事し、文事は全く僧侶の手に歸し、戰國時代に至つては一向宗亂を惹き起し、武人と僧徒の衝突は其の極點に達し、加越能の如き北陸地方の争亂、三河に於ける一揆、伊勢の長島一揆、大阪本願寺と織田信長との確執の如き、干戈連年絶えず、而かも本願寺を中心として毛利上杉武田等の東西の豪族が、自己の利害に依つて僧兵を利用し、又た其の嚮背を定め、斯くて攻伐侵略殆んど虚日なきの有様であつた。

豊臣秀吉に至つては僧侶を陣中に伴ひ、僧侶をして必ず先づ敵將を諭さしむるを常例とした私であるから、信長の如く僧徒を敵視すること

はなかつた。併しながら僧徒は既に其の長所と共に其の短所をも増長せしめて弊害百出の有様であつたから、徳川家康は夙に其の弊害に鑑みる所あつて、江戸幕府開始と共に佛教の社會的位置を褫奪して之を儒教に與へたのである。故に佛教は其の外觀に於ては大利を擁し、宗門の名目上からは幾百萬の門徒を有つてゐるが、其の内實は全く衰頽するの已むべからざるものがあつた。之れが原因は遠く武人との軋轢に胚胎せる自業自得の禍と言はねばならぬ。殊に其の武人が社會の大變動を遂行し之を統一した者であるから、國民の模範たる英傑は悉く武人より出で、僧侶は既に世道人心の上に於ける實權を武人の爲めに奪はれたので、武人の社會改革より開かれたる徳川時代に及んで、遂

に社會的地位を儒教に譲るの已むべからざるは自然の趨勢であつた。尤も此の趨勢は徳川幕府の施政方針に由ることは勿論であるが、其の施政方針は時勢に伴ふものであるから、佛教の衰頽は斯の如くにして明治維新に及んだのである。併し維新以來は再び其の頽勢を挽回し、宗教として將た學問として其の研究を進められつゝあるから、既に印度に氓び支那に衰へたる佛教は、日本佛教として獨り我國にのみ其の餘命を保つてゐる譯である。

斯う言ふ有様で儒教も日本に同化し、佛教も日本に同化したのであるから、耶蘇教も亦た當然日本化さるべき筈のものである。即ち同化されたる儒教は既に漢土の儒教でなく、同化されたる佛教も亦た既に印

度本來の佛教でないから、他日耶蘇教の同化さるゝの時、必ずや日本的耶蘇教となつて、泰西本來の耶蘇教と其の面目を一新するものたるべきは勿論であらう。今や其の傾向は續々として事實に出現しつゝあるを目撃するのであるが、此の耶蘇教は我國に於ては約四百年の歴史を有し、此の間盛衰消長の變化に富み、佛教の輸入當時と同じく殺戮流血の悲惨なる跡を印したのは、其の教義は我が國民道徳との一致點を見出すことに於て儒教の如く而かく多大なるものがなかつたからである。とは言へ其の教義は實踐躬行を旨とし、簡易平明にして熱烈なる信念を起さしめ、謂ゆる博愛の至情を強からしむるものがあつて雄然として世界的宗教たるは争ふべくもない。唯だ獨り儒教は其の輸

入と共に何等の障害もなくして直に我が國體と民性とに調和し、佛敎耶蘇敎の如き悲惨の歴史を留めなかつた譯は、儒敎の説く所は專ら現存的倫理の道德學として我が敬神の道に背反する所がないからであつた。と言ふのは忠孝仁義の五倫五常の道は、太古より我國に存するもので、儒敎の傳來に依つて始めて學んだものでなく、我が忠孝仁義の道は尙ほ却つて儒敎の説く所よりも秀絶で、至誠を以て天地の理法に合致し、忠孝一本の大道を一貫したものであるから、偶々儒敎の輸入に依つて益々其の眞義と光輝を發揮し、儒敎の眞髓を體得すると共に能く之を國民道德に同化し、以て其の教義を咀嚼實行するを得て、錦上更に花を添へた觀があるのである。要するに我が國風は儒敎化せら

れたのではなくして、儒敎は實に我が國風化せられたのである。故に耶蘇敎も亦た我が日本を耶蘇敎化するのではなくして、日本が耶蘇敎を日本化してこそ、其處に融合溶和の美を見る所以で、若し然らずとせば、兩者の間に圓滿なる關係を見んことは到底不可能の事である。今耶蘇敎の傳來を釋ねて見るに、過ぐる昔六百四十五十年前、頃は龜山天皇の御世の文永年間、蒙古の大軍が我國に來寇した時、楊州都督たりし伊太利人「マルコ、ポーロ」が、其の見聞録に我が日本の事情を叙述したのが、世界に我國を紹介した始めである。併し東洋寧ろ極東は尙ほ雲霧に閉ざれて、一般泰西の人士の眼中に映らなかつたのであるが、其の後二百餘年の春秋を送れる西曆千四百九十二年、即ち後土



御門天皇の御世の明應元年に至つて、世界歴史に特筆されたる亞米利加大陸の發見は西班牙人「コロンブス」に依つて成功せられ、加ふるに喜望峯を廻りて印度に航通するの海路は又た葡萄牙人に依つて開かれ、其の後も後柏原天皇の御世の永正七年即ち西曆千五百年に於て葡萄牙人は臥亞を占領し、「ジエシユイツト」教會堂を其の地に建設し進みて支那南邊に於ける貿易を開始し、是れより歐洲人は漸く東洋に向つて商權を擴張すると共に、又た耶蘇教を宣道するに至り、後三十餘年なる天文十年七月、葡萄牙商船は始めて我國に來り、豊後國神宮寺浦なる今の大分灣に現はれ、其の十二年八月には薩摩の南海中なる種子島の西村に漂着し、此の時始めて鐵砲を齎し、更に其の十七

切支丹宗の傳播

年には臥亞の宣教師「ザヴェー」が鹿兒島に來り、領主島津貴久の許可を得て布教に従つたのが即ち我國に於ける耶蘇教傳來の始めて、邦人は之を切支丹宗と呼んだのである。島津貴久は其の後幾もなく佛僧の勸めに従つて切支丹宗を禁じたから「ザヴェー」は肥前の平戸に遁れ、轉じて周防山口に入り、大内義隆に説いて宣教を許され、天文二十年九月義隆其の老臣陶晴賢の爲めに弑殺せらるゝや、大友宗麟は「ザヴェー」を豊後に迎へ、斯くて數年の間に平戸、山口、及び豊後の府内には天主堂の建設あるを見るに至り天正年間には日向の領主たりし伊東義祐の孫なる義賢は、宗麟の使者として羅馬に赴き、羅馬法王に謁見して其の款待を受け、歸朝以來切

支丹宗の布教に従事したのである。其の後永祿年間に至り織田信長は切支丹宗を歓迎して南蠻寺を京都に建て、其の信徒は畿内及び中國に蔓衍し、殊に九州は最も其の盛を極め、豊臣秀吉も亦た其の初めに於ては之を禁せなかつたから、大友、島津、有馬、大村、松浦などの九州の諸豪族は、各々皆便宜の要港を開いて外船を招き、内外の物品を交易賣買すると共に、切支丹宗の布教は次第に九州の各地に普及するに至つた。

然るに天正十五年、秀吉一たび之を禁じたので、耶蘇教の傳道師は或は心に含む所があつたものか、天正十五年、秀吉が島津氏を撃つての歸途筑前の博多を過ぎれるを好機とし、其の傳道師の長崎にある者が

往て博多に秀吉に謁した時の倨傲なる態度は、端なくも秀吉の憤怒を買ひ、命令一下總べての傳道師を海外に放逐するに至つた。之より形勢頓挫して非運に向ひ、其の十七年には京都の南蠻寺を毀つと共に宣教を禁じ、十九年閏正月宣教師「ワリニヤン」が印度副王の書を秀吉に呈したのであるが、遂に顧みる所とならず、切支丹宗の禁は却つて愈々嚴重なるに引き替へ、一方には佛法の信奉は益々深く、此の年秀吉は京都六條に、西本願寺を建て、文祿元年朝鮮征伐の最中に大政所の薨去となるや、之れが菩提を弔ふ爲めに高野山に青巖寺を建て、之れより先き方廣寺大佛を造り、専ら其の意を佛教に致して耶蘇教を斥け、文祿三年には切支丹宣教師の京都大坂に居る者を捕へて悉く之を

放逐し、其の信徒二千餘人を長崎に斬つた。併し耶蘇教信奉の勢力は之れが爲めに滅殺された譯でなく、畿内以西殊に九州方面に於ては却つて其の發展を見るの狀態であつた。

斯る間に歐洲では葡萄牙が衰へて和蘭が起り、慶長五年に和蘭の商船が始めて我が瀬戸内海に入つて堺浦に碇泊した。其處で徳川家康は之を相模の浦賀に廻航せしめ、船長「ヤムイヤウス」を江戸に召して海外の事情を問ひ、之れに宅地を與へ俸米を給して優遇したのである。即ち家康の意は大に海外との交通を開いて通商貿易の利を計るにあつたが、恰も好し西洋諸國も亦た益々意を東洋に注ぎ、且つ南部西細亞の諸國並に其の南島と我國との交通は逐年頻繁に赴いて來たのである。

之より先き慶長元年九月には西班牙の商船が土佐に漂着し、二年七月には呂宋が初めて入貢し、爾來互に國書の往復を行ひ、八年正月には家康より書を東埔寨國に與へ、十七年七月には暹羅國人を江戸城に引見し、十八年八月には英吉利人を引見し、皆符券を船長に與へて通商を許し、我が商人も亦た幕府の印券を得て海外に貿易する者多く京都の商人茶屋四郎次郎、伊勢の商人角屋七郎兵衛等の安南との貿易濱田彌兵衛の臺灣貿易、若くは駿府の人山田長政が暹羅に往つて日本町の壯丁を率ゐて其の國亂を鎮め、以て彼の地に暹羅副土として權勢を振ひ、慶長十八年九月には、伊達政宗の臣支倉常長等の一行六十九人が、陸奥國牡鹿郡月浦より發航して羅馬に往つたなど、我國力の海

外に於ける發展と、之れに伴ふ商權の擴張とは、將に益々大なるものあらんとし、其の儘引き續いて發達せしめたるならば、三百年後に於ける明治昭代を待たずして夙に世界的日本たり得たであらうと思はしめる程であつた。併し家康の憂ふる所は耶蘇教の蔓延であるから、海外との通商貿易を許せる一面に於ては、又た耶蘇教の傳播を防遏するに努め、既に慶長六年十月には一たび耶蘇教を禁じて宣教師を海外に放ち、豊臣秀吉の擧に倣ひて佛教に歸依し、其の十五年には東本願寺を京都に建て、東西兩本願寺が出来たのであるが、更に秀吉の造る所の延暦寺に寺領三千四百餘石、園城寺に三千石、高野山に二萬石を附し、皆朱印を押したる券狀を授けて之を御朱印地と唱へ、又た東大寺

正倉院の寶庫を修理し、其の寶物を點檢し、櫃函を新製して之を保藏せしめ、殊に敬神の至誠を明らかにせんが爲め、曩に江戸幕府開始に際し穀米を伊勢に給附して神宮更造の功を了へ、以て永例と定め、且つ山田奉行を置いて神宮所在地を嚴肅ならしめたのである。斯くて二代將軍秀忠に至り、慶長十六年八月には更に敬神崇佛の實を明かにして再び耶蘇教を禁じ、翌十七年三月には京都の天主教堂を毀ち、又た肥前の島原及び有馬は耶蘇信徒の巢窟であるから其の領主有馬晴信の罪を問ふて封を沒し死を賜ひ、十九年正月には、再び京都の耶蘇會堂を毀ち、其の三月には信徒中の有力者たる高山友祥、小西如安、加賀山隼人等を呂宋に放ち、六月更に其の他の信徒を和泉に捕へて處罰し

たのであるが、而かも信仰の力は之れが爲めに滅殺せらるべく若く薄弱なものではなかつた。即ち其の信徒は幕府の壓迫の下に依然として教旨を死守したのである。併しながら海外通商の許可は耶蘇教の禁制と矛盾し、到底其の一を許して他の一を防遏することは不可能であるから、幕府は寧ろ耶蘇教の禁を解いて開國進取の主義に依り益々海外貿易の發展を圖るべきか、若くは兩者共に之を禁じて斷然鎖國政策を執るべきかに就き頗る苦慮したのであるが、元和二年八月に至つて遂に斷乎として鎖國政策を執り、外船の互市を停めて耶蘇教禁止の令を嚴にし、我が商人の海外に往くを罰して、通商貿易の利を放擲するに至つたのは又た是非もない事である。

幕府の政策が茲に出た所以は専ら和蘭商人の献言に基づくもので、彼れ和蘭商人は能く幕府の苦慮する所を察知し、屢次書を呈して告げて言ふには、耶蘇教を唱へて之を傳播せんとする者は、實は日本を覬覦するに劍に依らずして宗教に依るものであるから、充分の注意を用ひなければ臍を嚙むとも及ばぬ後悔をせねばなるまいと言ふことを以てした。幕府は之を聞いて實に驚いたのである。其處で敬神崇佛と儒教普及の方針とに反する耶蘇教の排斥は、假令海外通商の利を失ふとも敢て厭ふ所ではないと決心し、朝鮮と支那と和蘭だけの交易は従前の通りとして、其の他は一切通商をも嚴禁したので、和蘭人は獨り我國に於ける商權を壟斷するを得て、爾來幕末に至るまで洋物は皆和蘭人

の手を経て輸入せられ。洋學なるものは悉く蘭學であつた、幕府の政  
 策は既に斯の如く鎖國主義を執るに至つたから、元和五年八月には、  
 耶蘇信徒六十餘人を京都七條磧に火刑に處し、三代將軍家光に至りて  
 は更に長崎の耶蘇信徒を嚴罰し、寛永十一年には外國往來の禁及び耶  
 蘇教嚴禁の高札を長崎に建て、翌十二年九月に至る迄の間に、其の信  
 徒を誅戮すること實に二十八萬人の多きに達せる悲惨事を極め、信徒  
 ならざる者をも尙ほ且つ悚然として膚に粟せしむるに至り、耶蘇教法  
 に涉れる圖書は皆焚棄して餘す所なからしめ、之を『禁書』と稱した  
 のである。是に於て教法を守れる一團は肥前島原に起り、寛永十四年  
 秋の暮、遂に發して亂と爲り、其の數三萬五千餘人、或は老弱或は

婦女、皆各々瓦礫を投じて死守し、翌十五年正月討伐軍の總將板倉重  
 昌は遂に敗死し、幕府狼狽して其の色を失ふと言ふ有様であつたが、  
 亂徒漸く食糧に乏しく、且つ戰に斃るる者日に益々多きを加へ、二  
 月二十七日に至りて遂に支へず、幕將松平信綱等其の老少を問はず悉  
 く之を斬殺して事漸く平たいたのであるが、爾來幕府は更に耶蘇教の禁  
 を嚴にし、貴賤を論せず貧富を問はず、皆悉く佛教に歸依せしめ、其  
 の歸依の寺を宗門寺と稱し、人別に宗門帳に記名署印するを要し、子  
 生るれば又た之れに記入し、別に宗門改役を置きて毎年其の宗門と  
 戸口帳簿を検査せしめ、或は三四年、或は四五年毎に大検査を行ひて  
 異宗門の有無を嚴糾し、又た踏繪を作りて或は銅板或は木板に耶蘇の

像を刻し、之を踏みて其の信徒に非ざるを誓はしめ、斯くて明治維新の大政復古に及んだのである。明治以後に於ては耶穌教の禁を解かれ、殊に憲法の制定と共に信教の自由を許され、外國の宣教師も盛んに我國に渡來し、到る處として教會堂の設立を見ざるはなき有様で、信徒も亦た次第に増加の傾向を示し、初めは不敬事件などの忌むべき問題も屢次耳にしたのであるが、年と共に國風に融合溶和せられて、稍圓滿の狀を呈し來り、未だ儒教佛敎の如く全く日本化せらるるに至らざるも、幾多年月の後には必ずや我が國民性に同化せられ、即ち「敷島の和錦に織りてこそからくれなるの色も榮えけれ」で、謂ゆる日本耶穌教たるの時も亦た遠きに

非ざるべしと思はれる。斯う言ふ有様で佛敎を日本化し、儒敎を日本化したる我が國民性の強大なる同化力は、今や更に耶穌敎をも日本化せんとしつゝあるのであるが、遡つて王朝時代に唐制を採りて典章を定められたる經過を顧み又た近く明治維新以來泰西の文物に學びて、其の精を採り其の滓を去り、長短相補へる消化力の絶大なるを見るに於て、世界何れの國民か能く我が日本人に匹敵する者があるであらうか。畢竟するに至誠純潔なる我が國民性が、能く萬有を包容融和するに依るからで『わが國に茂りあひけり外つ國の草木の苗もおほしたつれば』と詠まれたる歌の心こそ、實に同化力の絶大なるを説かれたものである。殊に四方環

海かいの島帝國たうていこくたるに於おて、古來こらい幾多いくたの人種じんしゆが皇化くわうくわの德風とくふうに依より、若もしくは潮流ちうりゆう風位ふうゐ等に依より、東西南北とうざいなんぼくより皇化くわ流寓りゆうい移殖いしよくし來きたれるもの枚舉まいきよに違いとなき有様ありさまであるが、皆みな克かつく忠良ちゆうりやうの臣民しんみんとして其その本分ほんぶんを守まもり、其その秩序ちつじよを保たもち、未いまだ曾かつて泰西たいせい諸國しよこくに於おけるが如ごとき人種じんしゆ上じやうの鬭争たうさうを惹ひき起おこせることなく、悉ことごとく日本にほん民族みんぞくとして融合ゆうがふ渾和こんわせる所以ゆゑのもの、固もとより廣大くわうだい無邊むへんの皇德くわうとくに因よるは勿論もちろんと言いひながら、亦またた民性みんせいの至誠しせい純潔じゆんけつに基もとづける同化どうくわ力りきの致いたす所ところで、今いまや新附しんぷの鮮人せんじんは又またた渾和こんわの實じつを擧あげ、臺灣たいわん蕃族ばんぞくの同化どうくわも將まさに近ちかきにあらんとしてゐるのである。斯かう言いふやうに我わが日本にほん國民性こくみんせいの同化どうくわ力りきの絶大ぜつだいなるは、其その國民性こくみんせいを成なすに至いたつた原因げんいんに溯さかのぼつて之これを釋たつねる必要ひつたうがある。即すなはち日本にほん國格こくかくの由よし

て來きたれる所以ゆゑを究きめねばならぬ。そもく國格こくかくとは國家こくかの人格じんかくであつて、國家こくかは一だいの大なる人格じんかくである。個人こじんに個人こじんの性格せいかくがある如ごとく、國家こくかには國家こくかの性格せいかくがある。故ゆゑに個人こじんは個人こじんの性格せいかくの上うへに立たつて活動くわつどうしつゝあるやうに、國家こくかは國家こくかの性格せいかくの上うへに立たつて活動くわつどうしつゝあるのである。其その個人こじんの性格せいかくは先天的せんてんてきに將はた後天的こうてんてきに支配しはいせらるゝ如ごとく、國家こくかの性格せいかくは地理的ちりてきに歴史れきし的に將はた人種じんしゆ的に支配しはいせらるゝものである。故ゆゑに甲かの國格こくかくと乙おつの國格こくかくとは多少たせうの相違さうゐあるを免まぬかぬ。例たとへば英吉利イギリス國民こくみんの歴史れきしがあつて其その地理ちりと相待あひまち、以もつて英吉利イギリス國こくとしての性格せいかくが出來できてゐる。又また露西亞ロシア國民こくみんの歴史れきしがあつて其その地理ちりと相待あひまち、以もつて「スラブ」民族みんぞくたる性格せいかくを馴致じゆんちしてゐるやうに、地理的ちりてき境遇きんぐうと祖宗そそうの



遺傳とは必至の勢となつて、其の國民の活動に伴ひ、茲に其の國特有の性格を作つたものが即ち國格である。然らば同化力の絶大なる日本國格とは果して何んなものであるか、其の國格は如何にして成立せられたか。暫く之を釋ねて見やう。

そもく天つ神の威靈に因つて我が國開闢の基を啓きしより以來、皇統は萬世一系で、寶祚は天地と俱に窮りがない。是れぞ我が國體の世界無比なる所以で、億兆の臣民が世々一心の美を濟し、以て忠孝兩つながら全きを致しつゝある譯である。即ち天照大神が皇孫尊に下し給へる大詔を拜するに『豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ吾が子孫の君たるべき國なり、爾皇孫就きて治らすべし、行きませ、寶祚

の隆ならんこと天壤と俱に窮りなかるべし』と仰せられたのである。是れ實に仁慈化育を旨とし給へる神慮を萬世に傳へて、世界に冠絶せる國家を形成し、仍て以て天地の悠久と共に不變不動の皇基を確立し給ふ所以である。されば『昔より流れ絶えせぬ五十鈴川なほ萬代もすまんとぞ思ふ』とも、又は『檀原の遠つ皇祖の宮柱たてそめしより國

は動かす』とも詠ませらるゝ次第である。斯る萬世一系の皇統と共に天壤無窮の寶祚に缺くべからざるものは、列聖相傳の神寶たる三種の神器である。即ち劔、鏡、璽の三種は、歴代の天皇が天下に君臨し給ふ唯一の徴證で、是れなくては正統の天皇と申し奉ることが出来ないのである。其の劔は勇武裁斷を示して神の

威靈を表昭し、以て平和の保障たるものであつて、決して殺伐殘戕を目的とするものでないことは、國家組織の初に當つて神代の神々が草木を生み、山川を生み、島嶼を生み、國土を生むと言はれたるに依つても、如何に仁愛を以て下に臨ませられたかを察知することが出来る。其の鏡は曇りなき明智を表示するもので、神徳を映すと共に至誠純潔の大道を照しつゝあるのである。されば『皆人の心もみがけ千早振る神の鏡の曇る時なく』と詠ませられてゐる譯である。其の璽は仁慈圓曲に象どりて神の和光を示し、以て博愛の徳を表明せらるゝもので、さればこそ『人心かゝらましかば白玉の眞玉は火にもやかれざりけり』と誠められたのも、即ち玉の光りの貴とさを人の心の誠に喩へさせ

られたのである。要するに此の三種の神器は、智仁勇の三徳を表象し之れに因つて治國安民の皇道を萬世に傳へ給ひ、歴代の天皇が踐祚即位の大禮に當つて必ず此の神寶を承けさせ給ふ所以で、而かも祖神以來數千年相傳の遺寶として今日に及べるものは、實に世界に於て我が日本國あるのみである。殊に其の御璽の光りと共に一視同仁の高徳に至つては、遠く祖神の雄大なる宏謨に於て窺ふを得べく、従つて列聖の博愛仁慈なるは『四方の海みなはらからと思ふ世になど波風の立ちさわぐらむ』と仰せられたる明治天皇の大御心に依つても亦た虔仰し奉る次第であるが、神道即ち皇道の經典とも稱すべき祝詞の祈年祭に於て、『伊勢に坐す天照

大御神の大前に白さく、皇大御神の見霧かし坐す四方の國は、天の壁立つ極み、國の退立つ限り、青雲のたなびく極み、白雲の墜り坐向か伏す限り、青海原は棹柁干さず、舟の艦の至り留る極み、大海に舟満ちつゝけて、陸より往く道は、荷の緒結ひ堅めて、磐根木の根履みさくみて、馬の爪の至り留る限り、長道間なく立ちつゝけて、狭き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打ち掛けて引き寄することの如く、皇大御神の寄さしまつり給へば、荷前は皇大御神の大前に横山の如く打ち積み置きて、残りをば平けく聞しめし、又た皇御孫命の御世を手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸はへ奉る故、皇吾睦神漏伎、神漏瀾命と、宇事物頭根衝き抜き、皇御孫命の宇

豆の幣帛を、稱へ辭竟へ奉らくと宣り給ふ」とあるを拜誦すれば、青雲のたなびく極み、白雲のむか伏す限り、舟の艦の至らん極み、馬の爪の至り留る限り、水陸の際涯を極めて神德皇道の如何に廣大無邊なるかを窺ふを得べく、其の遠き國は八十綱打ち掛けて引き寄することの如く、近きを撫で遠きを徳化せらるゝ平和的四海統治の宏大なる皇謨と其の仁慈盛徳とは、世界の何れの國が之れに若くものがあらうされば建國の天業を闢きて萬世の皇基を定め、國家を擁護して康福を民生に授け給へる天つ神の威靈を崇敬奉祀し、以て神徳を仰ぎ神恩に應へ奉るは、吾等臣民たる者の本分で、教育の淵源は實に茲に基づくのである。殊に吾等の君父たる天皇は、即ち天つ神の聖孫に在りまして、

日本民族たる一大家族の君長であらせらるゝから、天皇の赤子たる吾等臣民が、敬神の大道に據つて至誠を天皇に捧げ奉るは、即ち神恩に應へて君恩に報ずる本分で、此の至誠の本分こそは即ち忠道である。彼の大伴家持が『海ゆかば水つく屍、山ゆかば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ、長閑には死なじ』と歌ひて子孫に遺したる名訓は、即ち一死報効の至誠を示したもので、是れぞ忠君の極致、武士道精神の骨髄である。而かも日本帝國は天つ神の生成に依り、歴聖相承けて萬世に統治し給ひ、國民は皇室を中心として和合團結せるものであるから忠君の至誠は即ち又た愛國の至誠で、忠君を離れて愛國なく、愛國を離れて忠臣なく、忠君と愛國とは其の名に於て異つてゐるも、其の實

に於て同義一體たるは、是れぞ我が國體の萬邦無比なる所以であつて古來我が國に革命なるものゝ絶無なるも全く之れが爲めである。此の忠君愛國の至誠は敬神に基づき、敬神は又た皇道の淵源たる大孝の本義である。初め天照大神が三種の神器を皇孫に授け給ひ、殊に其の神鏡を授けらるゝに當つて、『此の鏡を見ること猶ほ吾を視るが如くし、殿を同うし、牀を共にし、日夕吾を拜するが如く齋き奉れ』と仰せ給へるは、是れぞ敬神祭祀の本源で、即ち大孝を申へ給ふ所以の皇道の根柢である。由來鏡に對して映る所の自己の姿は、實は父祖の御姿である。父祖の御姿に對して其の遺徳を仰ぎ其の遺業を繼紹するの時、誰れか其の父祖を尊敬し、其の遺訓を遵守せざる者やある。之を

四八六  
尊敬し之を遵守するは即ち大孝を申ぶる所以で、敬神祭祀の本義は實に茲に存するのであるから、神武天皇は其の即位の初めに於て、八神及び皇祖天神を鎮祭し給へるは、即ち祖神崇敬の誠を表示せられ、祖神の威靈遺徳に依つて天業を恢弘し皇基を確立するを得たるの天恩を報謝し、以て大孝の聖徳を明かにせられたものである。爾來歴代の天皇も亦た此の主旨に準りて國家を統治し給ふと共に、祖宗の神靈を奉祭し、其の遺徳遺訓、虔仰遵守して、治國安民の要道とせられたのである。列聖にして既に斯の通りであるから、億兆の臣民は尙更ら聖旨を奉體して敬神祭祀の大道を全うすべきは勿論で、忠孝兩全の至誠は即ち此の大道より發するのである。即ち『目に見えぬ神の心にかよ

致政の一

ふこそ人の心の誠なりけれ』とも又は『曇りなき人の心を千早振る神はさやかに照し見るらむ』とも言はるゝ通り、敬神祭祀は其の心を誠にし、心身共に清淨純潔にして、以て神に合一する所に其の美を發揮し得るのであるから、敬を措きて自他の歸一を見ることは難く、愛を棄て、自他の合一を期することも出来ない。故に至誠敬愛にして始めて神人合一の實を得る所以である。既に敬神祭祀は大孝を申ぶる所以で、祖神の遺訓を遵守し其の遺業を繼紹するは即ち其の大孝たる治國の要道であるから、國家統治の大權は天つ神の命じ給へるもので、天皇は其の天つ神の御子なるが故に、天つ神と同心一體にましくて萬世一系の皇位に居り、以て天壤と俱

に窮りなく大權を統べさせ給ふ所以である。されば歴代の天皇が至誠敬愛を以て祖神を祭り、以て祖神に合一せらるゝ祭神の本旨は、即ち祖神の心を心として國家の安泰と民生の幸福とを期待せらるゝ治國の要道と一致するは勿論であるから、祖神を祭祀して祖神の心に合一するは、祖神の心を體する治國の政道と離るべからざる所以で、敬神の本旨たる祭事と、此の本旨に基づける政事とは、常に國訓相通するのみでなく、其の根本精神に於て同一であるから、祭政の一致は實に我が國體の特色と言はねばならぬ。

然るに泰西の學者は祭神を以て單に祖先崇拜なりとし、從つて祭政の一致を未開若くは半開時代の産物なるかの如く説く者のあるのは、未

だ我が國體の神髓を解せざるの致す所である。固より蠻民と雖も子として親を思はぬ者はなく、既に親を思へば祖先を敬せぬ者はない筈であるが、唯だ之を崇拜するの外、又た何等の意味なきに於ては、到底祭政一致の眞義を貫徹することは出来ないのである。世界萬國の中にあつて其の國家成立の根本を異にせる我が國に於ては、同じく祖先を崇拜し之を敬愛するとも、其の精神に於て他邦と同一ではない。何となれば此の國家を組織し、偉業を建て遺訓を貽されたる祖先に對して子孫の盡すべき大孝を申べんが爲めに、祖先の偉業を繼紹し、遺訓を遵守し、其の高風を景慕し、其の威徳を虔仰して、之を敬し之を祭ることとは、神人合一の實を得て、更に治國安民の要道を全うするの精神

に出づるのであるから、單に同種に族の感想のみよりする祖先崇拜とは其の形式に於て似たる所ありとするも、其の精神に於て相距ること甚だ遠きものがある。既に精神に於て相距ること甚だ遠きものがあるから、其の治國安民の上に現はれたる結果が同日の論でないことは敢て多言を要する迄もないのである。

既に祖神を敬愛し之を祭祀するは國家統治の本源で、國政は先づ祖神の祭祀より始まるのであるから、敬神祭祀は治國の理想的本義である而して教育は其國に於ける現代及び將來の子孫に對する理想主義の發現たるに於て、我が國にあつては敬神祭祀と相離るべからざるものである。即ち教育の大本は國體を闡明ならしむるにあつて、國體を闡明

ならしむるは曩に明治二十三年の聖勅に於て虔仰する如く、建國の由來を究めて天地と始終せる皇道に則り、祖先の遺徳を仰ぎて其の遺風を顯彰するにあるから、祖先の祭祀に基づく所の國政と、祖先の遺訓を奉體する教育の本義とは固より一體でなければならぬ。されば明治天皇は『神つ世の御代の掟をたがへじと思ふぞおのがねがひなりける』と仰せ給へる所以である。即ち忠孝、禮節、信義、和親、博愛、仁恭、至誠、純潔、質實、剛毅、義勇、奉公の道は教育の要旨で、皆祖先以來の遺訓である。此の遺訓は即ち又た國家を統治せらるゝ政道の要旨であるから、祭政の一致と共に政教の一體たるは、實に我が國體の精髓である。

茲に屢次言ふ所の祖神は即ち建國の祖先であつて、他の外國で言ふ所の理想的無形の神ではないから、吾等が神を敬し神を祭るは、祖先を敬し祖先を祭るので、子孫が其の父祖に對する孝道である。而して此の孝道を體して君に事ふるは即ち忠道である。何となれば天皇は建國祖神の神裔にましますから、吾等が天皇に忠なるは建國祖神に忠なる所以で、又た祖先に孝なる所以であるからである。言ふ迄もなく建國祖神は直接に間接に吾等の祖先であり同時に君父であらせられる。されば氏神は吾等の小にして近き祖先であり、建國祖神は大にして遠き祖先である。其の大にして近き神は即ち現代の天皇であらせられる。其の天皇は建國祖神の御延長たる現神に在し、同時に吾等の君父で、

吾等は天皇の赤子である。且つ又た吾等は建國祖神の赤子たりし當時の祖先の延長で、其の祖先は建國祖神の分裔支流たる者もある。斯う言ふ次第で祖先と子孫、父母と赤子との關係から、敬愛親和を本旨として上下萬民が一心同體たるは固より本分であるが、斯の如きは到底我が日本以外の國々に於ては實現し得られざる特色で、而かも萬國は理想としては我國の如き國體を希望しつゝあるは當然である。要するに我國統治權の主體たる天壤無窮の寶祚は、萬世一系の皇統が天地と始終して知らせ給ふもので、固より人為法制の左右し得る所ではない且つ之れが統治權の客體たる日本國土及び民族は、他の外國の如く偶然に若くは強弱爭奪の結果に依つて形成統合せられた者ではない。



即ち斯の國土は天つ神の生成經營し給へる所で、斯の民は天つ神の遠孫赤子たる青人草である。或は歸化漂着、或は移殖流寓俘虜の民もあるが、而かも皆同化融合せられて、本來此の土に發生せる民草として擧げて天皇の赤子たるの實を見ざるはないのであるから、君臣は親子の誼を有し、一國は一家の膨大したものである。此の點に於ても亦た君に忠なるは親に孝なる所以で、忠孝は其の本源を一にするのである。されば源實朝が『山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心我れあらめやも』と言つてゐるのは、能く忠孝一本の大道を説き明したものであるが、此の大道は國初以來萬世に一貫する所であるから、又た祖先が盡す所の忠道に因ることは子孫が祖先に對する孝道で、此の孝道を

體して天皇に事へ奉るは即ち現代臣民の忠道である。斯くて忠孝兩全たるを得る所以であるが、其の兩全たり得るは忠孝其の本を一にするからである。斯る忠孝一本の大道に依つて忠孝兩全の美果を結び、忠君の至誠と熾烈なる愛國心とは凝つて渾然たる美玉を爲したものが即ち日本魂である。明治天皇が『事しあらば火にも水にも入らばやと思ふはやがて日本魂』と仰せられたやうに、君國の爲めには身命を犠牲として水火の難を辭せず、一旦緩急あれば義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼し、平時の良民は有時の忠臣として報効の至誠を致すのが即ち日本魂の發揮である。由來日本人は犠牲的精神に富み、忠孝仁義の信念

を具備し、諸外國に於ける個人主義とは全く其の趣を異にしてゐるのであるが、斯る精神の活躍は始終不斷千世一貫で、其の忠君愛國の至誠は發して犠牲的高潔なる行動となり、同胞親愛の實も亦た之れが爲めに舉り、謂ゆる舉國一致億兆一心の美を濟す所以であるから、日本魂と稱するは即ち斯る犠牲的精神の發動に外ならぬのである。

此の舉國一致一心同體たる所以を發揮せんが爲めには、即ち上下の分を亂さざるを要し、上下の分擔權限を明かにせねばならぬ。而して此の分擔權限を實行することに於て上下同心一體に歸するのであるから茲に神人の歸一、人々の合一、上下の一致を生命とする所の生活々動の理想的規範が生ずる。此の理想的規範は即ち建國祖神が事實に於て

示し給へる遺績遺訓であつて、之を神道と言ふのである。此の神道は日本を中心とし若くは日本を出發點として、日本民族の大理想であるから、更に之を擴張すれば則ち世界的大理想たり得るもので、又た決して抽象的の理論でもなく、推理上の結果より案出したる規範でもなく、神代の神々が實行せられ、事實上に於て示されたる天地一貫萬代不變の規範である。即ち古今を通じ、上下を通じ、億兆萬民を通じ、世界全般に通ずる生活々動の大理想であるから、政治でも經濟でも法律でも道徳でも教育でも美術でも工藝でも皆其の根柢を神道に發し、確乎不動の活生命を附與せられつゝ日本民族の特色、日本國家の特色を過去現在將來に互りて發揮せしめらるべく、一心同體の實を顯現し、

更に進みて此の大精神の實行を世界全般に及ぼさるべきものは、實に神道の神道たる所以である。此の神道の發現は即ち神代に於ける祖神の活動の事蹟で、神道の闡明は祖神の大詔遺訓であるが、皇道は此の神道を繼承し給へるもので、神道は皇道を胚胎するものである。唯だ紀元以前に於ては之を神道と稱し、紀元以後に於て之を皇道と稱するに過ぎないのであるから、神道と皇道とは固より一義一體たるは勿論であつて、列聖統治の實績は日月の明の如く、其の德澤は天地の大如き皇道の威靈は、實に神道の威靈德澤に外ならぬ。故に皇宗皇祖の遺德遺訓に基づき、三種の神寶に因つて智仁勇の三德を表象實現し、敬神を主として治國安民の德澤を布き給ふは即ち皇道の靈光發現で、

列聖の詔勅は皇道の闡明である。されば歴代の天皇は仁慈と平和の聖德を以て下萬民に臨み給ひ、或は寒夜御衣を脱して民の凍餒を察せられ、又た高臺に烟を望みて民生の安泰を悦び給ふ所以である。若し夫れ天變地異疫疾凶歳等の災厄あるに當つては、之れが救恤を軫念あらせ給ひ、躬を以て神明の擁護を祈らせられ、更に彼の八十綱打ち掛けを引き寄するが如く、近きを綏撫し遠きを招致し、以て無限の皇德を四海に均霑せしめ給ひ、或は已むを得ずして皇師を出さるゝも、亦た必ず平和の保障の爲め強暴を膺懲するの仁義の師ならざるはなく、中外齊しく皇風を瞻仰するの事實に徴すれば、皇道の威德は獨り我が神州に磅礴するのみでなく、實に天地宇宙の間に充滿して、能く萬法を

包容し、萬教を醇化する所のもので、是れ即ち神道を繼承し神道より  
胚胎したるに外ならぬ。換言すれば祖神の心を心としたる列聖の威徳  
である。

此の神道即ち皇道は、神人及び人々の合一を本旨とし、其の同心一體  
を實現するを理想とするから、其處に絶大なる同化力があるのである  
即ち精神上物質上生理上の總べての點に於て一切萬物を包容し、神  
人融合の實を永遠に顯揚するのであるから、同一祖先の下に同一精神  
を繼承し、其の絶大なる同化力に依つて益々皇道の精髓を發揮し、異  
種の文明開化でも、他國の文物典章でも、將た又た異種の民族でも、  
悉く之を包容融合して愈々益々皇道の威徳を擴張發揮する所に其の

精髓が顯現せられ、如何なる精神的物質的輸入でも之を排斥すること  
なくして、却つて神人の同心一體たる所以を助成するの資料として之  
を歡迎すると共に之を同化し、既に同化したるに於ては其の初めは外  
來の人種たり、外來の文明たり、外來の物質たり、外來の宗教たりと  
も、遂に日本在來のものたる同一體を顯現することは、既に古來の歸  
化人、俘虜、流寓者の多數が日本民族として、同化の實を表し、現に  
新附の鮮人、臺灣、樺太の住民も亦た同心一體の觀念を有し、唐代の  
典章、泰西の文物が早く日本化せられ、儒教は漢土の儒教でなく、佛  
教は印度本來の佛教でなく、耶蘇教も亦た遠からず日本耶蘇教たるの  
傾向を示せるに徴しても明白なる事實である。斯の如きは我國を除く

て世界に其の類例を見ることが出来ないのであるが、吾等は此の皇道を理想として自己を観察すれば、孤獨なる自己以上に更に大生命を有する自己あるを見出し、自己を救ふの精神を擴張して濟他に及ぼし、以て自他合一の自己を認識せねばならぬ。即ち自己は自己一人の自己でなくして國家と合致し、神人歸一の域に達することが出来るのであるから、日本人としては日本國家と一致し、國家の憂を以て自己の憂とし、國家の喜びを以て自己の喜びとするに至つて、始めて孤獨の自己なるものが自己を煩悶せしむることなく、一身の憂は憂にあらず、一身の悲みは悲みに非ずして、心懷潤然、常に光風霽月の感があつて、浩然の氣天地の間に満ち、謂ゆる萬有を包含融和するを得て、其

處に絶大なる同化力を實現することが出来るのである。斯る人物にして始めて始めて社會を善導し、國家に裨益する有爲の材たり得るのである。前途あるの青年は特に此の點に注意して修養を積まれんことを切望して置く。

### 七 修養と人格

嚴冬霜雪の難を凌ぎてこそ、松の千歳の緑も榮え、玉も磨きて後にこそ夜光連城の美を増すのである。人に修養の缺くべからざるも亦た之れと同じで、心身の鍊磨を重ね鍛冶を積まねば、到底高潔偉大なる人格の完成を望むことは出来ない。されば『磨かずは玉も光りはいでざ

らむ人の心もかくぞあるべき』と誠められ、又は『雪にたへ嵐にたへし後にこそ松の位も高く見えけれ』と訓へられてあるのである。陽春三月百花爛漫の好季節に於て、人は唯だ其の盛りの花の美に酔ふのみであるが、其の花は春に至つて俄に咲いたのではない。秋を過ぎ冬を経て準備全く成り、漸く春の時を得て始めて美花を開き芳香を放つものである。英雄偉人の大業を成すを見て、唯だ其の成功を羨望する者は、恰も春の花に酔へると一般で、其の成功の因つて來る所を究めず秋冬霜雪の鍛錬と幾多心身の修養とを積める結果たるに想ひ到らずば何れの時か又た一事一業を成し得られるであらうか。此に於て修養の必要を見るのである。

修養の語

此の修養と言ふ詞は廣義にも狹義にも解せらるゝのであるが、一般には身を修め徳を養ふことを言ふのであつて、其の身を修めると言ふ中には徳を養ふことも含み、徳を養ふ中には又た固より身を修むることを含んでゐるのである。即ち大學には『古の明德を天下に明にせんと欲する者は先づ其の身を修む』と言ひ、孟子は『浩然の氣を養ふ』と言ひ、諸葛孔明は『靜以て身を修め、儉以て徳を養ふ』と言つてゐるなどは皆『修養』の語の由て來る所であらう。英語では之を『カルチュア』と言つてゐる。『カルチュア』と言ふことは本來は開拓耕作の義であるが、轉じて修練、洗練、又は修養の義に用ひられてゐる。畢竟するに心田を耕作開拓し、品性を修練するを言ふのである。尤も身

を修めると言ふことは重きを其の心を修めるの義に置くのであるが、身も心も客観と主観の相違に過ぎないので、精神は身體に、身體は精神に依つて、互に健全ともなり、病苦ともなるのであるから、何れの一を等閑にすることも出来ないのは勿論である。

故に身體の健全を計ることは修養の第一歩であるから、衛生の必要も起り、食慾性慾の制裁も生ずる譯であるが、或る一部の宗教家若くは其の信徒が、斷食虐體して徒らに健全なる精神を求めんとするが如き偏癪なる修養法は吾等の採らざる所で、體力の養成全からざるに、何を以て精神の修養其の宜しきを得らるべき道理があらう。言ふ迄もなく剛健なる精神は剛健なる身體に宿るのは原則である。然り原則であ

るから吾等は大に身體を鍛錬して其の健全を期せねばならぬ。併し人の禽獸と異なる所は其の體力よりも其の精神にある。即ち其の心靈にあるのであるから、修養の第一歩は身體の剛健を期するにあるも、修養の奥義は之を精神に置かねばならぬ。之を精神に置いてこそ身を修むるの本も立ち、徳を養ふの源も起るので、其の身を修め徳を養ふには必ずや智情意の三方面に向つて眞善美の域に達するを理想とせねばならぬ。其の智情意は即ち智仁勇であつて、智の求むる所の眞は理と義である。情の趣く所の美は仁と愛である。意の到る所の善は勇と行とである。固より此の三方面は各々其の嚮ふ所を異にするも、而かも其の本は一つであるから、智の嚮ふ所に情意の伴ふあり、意の行く所に

智情ちじやうの随したがふあり、情じやうの趣おもむく所に智勇ちいうの加くははるにあらざれば、三者しやう常に  
 杆格かんかくして心中しんちゆうに煩悶はんもん絶えず、思慮しりよ紛糾ぶんきゆうして統一いついを缺かき、之これが爲ために  
 智ちに偏へんして情じやうを解かいせず、情じやうに偏へんして理智りちに暗くらく、或あるは義理ぎり人情にんじやうを顧かへり  
 ずして頑迷ぐんめい偏僻へんぺきなる意思いしを遂行すいかうせんとする者ものあるに至いたるのであるから  
 其その偏へんする所ところを矯ため、其その枉まがれる所ところを直なほし、智情意ちじやういの三者しやう渾然こんぜんとし  
 て融合ゆうがふしてこそ、始はじめて理智りちに明あきらかにして正せいを踏ふみ、人情にんじやうに厚あつくして仁  
 愛あいに富とみ、事ことに當あたつて邁進まいしん堅忍けんじんの勇いうを奮ふるふの人ひとたるを得うるのであるが  
 是これ實じつに修養しうやうの力ちからに待まちたねばならぬのである。  
 吾等われらは修養しうやうの必要ひつやうと其その目的もくてきとを了解れうかいしたのであるが、更さらに其その修養しうやう  
 の方面ほうめんたる智情意ちじやうい即すなはち智仁勇ちじんいうを分類ぶんるふして、詳細しやうさいに之それを觀察くわんさつしやうと思おも

ふ。即すなはち先まづ個人こじん的てき修養しうやうと社會しやくわい的てき修養しうやうとに二大別だいにふつすれば、其その個人こじん的てき  
 には身みを修おさめ徳とくを養やしなひ、其その社會しやくわい的てきには世よに處しよし道みちを行おこなふこと  
 になる。身體しんたいの修養しうやうに於おいても、個人こじん的てきには衛生ゑいせいの遵守じゆんしゆ、慾情よくじやうの自制じせい、  
 體育たいいくの奨勵しやうれいなどがあり、社會しやくわい的てきには疫疾えきしつの豫防よぼう、公衆衛生こうしゆゑいせいの設備せつび、若  
 くは儀容ぎようの端正たんせい、居坐進退きざしんたいの節度せつどなどがある。更さらに理智りちの方面ほうめんに於おて  
 は個人こじん的てきに智能ちのうの啓發けいはつ、智識ちしきの整理せいり、明敏めいびんなる觀察くわんさつ、沈重ちんちゆうなる思慮しりよ、  
 公明こうめいなる判断はんだんなどがあり、社會しやくわい的てきには智識ちしきの應用おうよう、世態せたいの通曉つうきやう、社會  
 發展はつてんの促進そくしんなどがある。其その人情にんじやうの方面ほうめんに於おては個人こじん的てきに趣味しゆみの涵養かんやう  
 と發展はつてんがあり、社會しやくわい的てきには寬量くわんりやう大度たいど、博愛はくあい同情どうじやう、規律きりつの遵守じゆんしゆ、仁慈じんじ濟  
 他たの發揮はつぱいがある。其その意志いしの方面ほうめんに於おては、個人こじん的てきに氣力きりよくの養成やうせい、克



己自製の修練、堅忍不拔、守分知足などがあり、社会的には守約律正  
勇奮向上、勤勉力行などがある。斯の如く身心相待ちて其の修養を積  
み、殊に精神方面に於て個人的に社会的に其の鍛錬を重ねてこそ、始  
めて人格の完成を期し得るのであるが、世には其の修養を怠りて、而  
かも珠玉の美を望む者ががないでもない。斯る人々は宜しく明治天皇の  
『白玉を光りなしとも思ふかな、磨き足らざることを忘れて』の御製  
を服膺して、珠玉も尚ほ且つ切磋琢磨の功を待つて其の光りを發つこ  
とを肝銘せねばならぬ。

しき人物には新しき修養を要する。即ち武門政治の封建時代と、立憲  
治下の大正時代とは、固より同日の論でないことは明である通りに、  
古人の修養法のみを以て今人を律することの出来ないことも亦た明白  
である。塵埃の世俗を脱して清風明月に自己を潔うし、口を溪流に漱  
ぎ、耳を清泉に洗ひ、獨り閑寂を樂める古人の修養は、日進月歩の社  
會に立ちて活動し、生存競争の激甚なる活舞臺に飛躍せんとする今人  
を導くには足らないのである。一簞の食、一瓢の飲、陋巷にあつて其  
の樂みを改めざるは、如何にも欣慕に値するものがあると言へ、社  
會の活劇場裡と没交渉なる靜居晏坐は、學びて以て今人の法とするこ  
とは出来ない。或は又た封建時代の武士氣質は、剛健質實の美點に於

て學ぶべきも、廣く世界を達觀せざるの偏狹粗豪に至つては採らざる所である。即ち社會の進歩發展と制度文物の改廢とに依れる新時代、鎖國政策を排して世界的日本たる新時代に於ては、時代の要求に應じて手腕を振ひ、當世に處して有用の材たるべく修養を積むでなければ到底社會の廢物たるを免れないのである。従つて之れが教育に至つても亦た昔と今と同一轍たるを得ないのは勿論である。

此の教育は廣義に解すれば修養を包含し、修養は又た廣義に於ける教育と言ふことも出来るが、通常一般には修養は自働的で、教育は他働的であるから、自己が自己を教育するのは修養で、自己が他に依つて導かるゝのが教育である。即ち教育は他働的であるが故に、教育者と

被教育者との別があり、修養は自働的なるが故に、教育者と被教育者との對立を要せぬ。若し強ひて之を言へば自己が教育者たると同時に又た被教育者である。假令他に依つて教育せらるゝことありとも、開は一定の指導者に依つて具體的に教育せらるゝのではなくして、見聞する所の者は皆教育者である。其の教育者は人のみではない、山川草木も、冰雪月花も、日月星辰も、美術工藝も、詩歌文章も、苟くも天地宇宙の森羅萬象、社會百般の事態人情に至るまで、皆悉く自己を啓發し自己を教育するもので無い物はない。されば普通一般の教育は其の範圍に於て狭く、其の時期に於て短いのであるが、修養に至つては生涯其の終結を告ぐるものでなく、其の範圍も亦た極めて廣汎である。

併しながら修養と教育とは相離反するものではない。否大に密接連繫しつゝ人格の完成を期すべきものであるから、一面には教育を受けつゝ修養を積み、又た一面には修養を積みつゝ教育を授けねばならぬ。此の教育と言ふ詞は羅甸語の「エヂユカシオ」より出て、英語の「エヂュケーション」となつたもので『引き出す』又は『導き出す』の義であるが、泰西の學者は之を解して『教育とは、人の完全、幸福、及び社會的運命を全うするを目的として、身體、智識、及び道德的諸能力を發達せしめんが爲め、自然を補助する吾人の考想的作業なり』と言ひ、或は『最大多數の人々をして完全なる健康を保たしめ、其の心身の能力を發達せしめて、人類社會の進歩に協力せしむるにあり』と

言ひ、又た或は『人の内的生活の陶冶し易き時代に於て、具案的に影響を與へて、之れに一定の形を備へしめんとするにあり』と言ひ、若くは『完全なる生活に必要な準備を爲さしむるにあり』と言つてゐる併しながら教育なるものは學校のみを以て萬能とすることは出来ぬ。家庭教育の必要は言ふも更なり、社會教育も亦た輕々に看過するを許さぬのである。殊に國民としては其の國體に準應し、其の國民道德を基礎として、學術技藝の研究、智能の啓發、徳器の成就を期せねばならぬから、教育は其國に於ける歴史の成跡を本據とし、現代に於ける社會の進歩に伴ひて智徳を啓發成就せしめ、兼ねて將來の發展に資せしむべき理想主義の發現でなければならぬ。此の點に於て修養と教育

とは其の所期を一致するのであつて、唯だ自働的と他働的との區別あるに過ぎないのである。

そもく、人生の教育は其の生れざる以前に始まり、胎教に依つて既に教育の端緒を開かれるのである。胎教と言ふは其の子の胎内にあるに當つて其の母の修養が直に其の子に影響することを言ふのであつて、目に悪色を視ず、耳に悪聲を聴かず、口に悪言を出さず、居るに片膝立ちせず、怒るとも罵らずなどと誠められてゐるのは、即ち胎教の消極的方面であるが、其の積極的方面に於ては、目に美色を視、耳に美聲を聴き、口に善言を出し、居座進退共に靜肅にして秩序あり、怒らず、悲まず、憂へず、悶えず、偉人の肖像を其の居室に掲げて偉業を

偲び、英雄の傳記を讀みて其の言行を體得するなどが夫れである。既に生れては胎教を離れて家庭教育となるのであつて、父母の一言一行は皆其の模範であるから、修養に乏しくして人格の下劣なる父母の膝下にある者は、又た常に之を見聞して第二の天性を爲し、人格高潔にして修養を積める家庭の子女は、又た之れに習ひて優秀なる性格を作り得るのである。殊に幼時に於ける教育習慣は終生之を脱することが困難であるから、学校教育を受くる以前に於ての家庭教育は、其の子女の將來に至大の關係を有するものである。固より学校教育を受くるに至つても、家庭教育に於て毫も油斷すべからざるは勿論であるが、其の子弟の長ずるに従つて、家庭教育との關係は次第に薄く、學校教

育との關係は次第に厚く、益々長するに及びては、學校教育を離れて社會教育との關係を密接ならしむるに至るのが順序である。尤も茲に社會教育と言ふのは、社會的制裁、社會の制度風俗習慣等が及ぼす所の教化の義である。

元來學校教育は家庭教育を補ふものであるが、家庭は個々別々であつて其の教育方針を一定する事が出来ないのと、或程度以上は家庭の力を以て到底高等の教育を授ける譯には行かぬから、國家として社會として公共的に國民を教育する學校制度を探り、一には家庭教育を補ひ進んで國民全般の智能を啓發し、徳器の成就を計り、現代に於ける必須有用の人物を作るを目的とするのであるが、之れにも其の順序があ

つて、義務教育より普通教育に進み、更に高等専門の教育に入るのである。併し時代の趨勢は學校教育をして智能の發達に傾かしめ、品性の陶冶に至つては其の訓育甚だ薄弱なるが如く感ぜらるゝのは、缺陷と言へば正に缺陷たるに相違はないが、此の缺陷を補ふのは又た家庭に於ける父兄と、社會に於ける教化との力に待たねばならぬ。其の社會教育の智的方面には、圖書館の設置、通俗講演會の開催、各地に於ける講習會、共進會、博覽會等があり、其の徳育方面には、道徳團體の設立、青年團體の規約勵行、風俗改良會、宗教團體若くは寺院教會の感化等があり、智育美育を兼ねたるものには、幻燈會、音樂會、演劇、美術展覽會等があり、其の體育には體育場の設置、演武場、角

力會、競馬會、衛生組合、運動會などがある。而して感化の最も大なるものは善美なる郷風、醇良なる風習と、且つ嚴格なる社會的制裁とであつて、風俗習慣の善美なるは積極的感化であるが制裁の嚴格なるは消極的排斥である。斯の如くにして教育せられたる人物は、即ち其の時代に適應したる有用の材たるべきは勿論であるが、吾等は此等の教育を重んずると共に、更に一層の重きを修養に置かねばならぬのである。

漸く修養期に入るのである。即ち幼時に於ては外界に順應しつゝ何等の反抗もなく、慾望もなく、不平もなく、煩悶もなかつた者が、次第に長ずるに及びては自我の存在明かなると共に、外界に對する取捨の念起り、物欲の誘惑ますます激しくして、智能の發達を妨げ、徳性の涵養を害し、一路向上の發展と、失墜墮落の深淵と、此處一代の運命を決すべき人生の危機に迫るのである。夫れが即ち青年時代で、此の時代に吾等は如何に四圍の誘惑を撃攘すべきか、如何に品性を向上せしむべきか、如何に煩惱の闇を破つて日月の光明を見るべきか、凡俗の間に處して如何に清淨の心境に住すべきか、一念不動、寛容の度量を抱き、秋霜烈日、剛毅の精神を養ひ、以て如何に新時代の要求する

大人物たるべきか、順逆の二路實に此の時に岐るゝのであるから、修養の必要は青年時代より急切なるものは無いのである。此の修養には自己の發心に依るものと、自然の感化に依るものがある。其の自然の感化に於ては、吾等は風土の影響を免るゝことが出来ない。山水明媚なる日本の國土は、至誠純潔なる民性を涵養せしめたやうに、一郷一邑、一山一川、一草一木に至るまで、絶えず吾等を感化しつゝあるのである。故に歐亞大陸の地理的差別を観るものは、又た必ずや東西兩洋に於ける國民の性格に相違あるを首肯くであらう。羅馬希臘の古代文明は地中海の賜物であるやうに、我が日本の近畿地方の發達と人口の稠密は、瀬戸内海の賜物である。筑紫の涯の博多が

其の昔那の津と言つた時分から、日本第一の要港として外國往來の衝區となり、太宰府までも設けられたのは、玄海灘を受けてゐるからである。泉州堺の浦は近古時代の要津であつたが、今は神戸に其の勢力を吸収せられながらも、大阪港は依然として繁盛を失はず、大阪市街は益々發展の徴あるは、一は海運の便と、一は畿内中國の咽喉を扼してゐるからである。東京の膨脹は輦轂の下であるからと言ふのみでなく、日本一の平野を控へて東京灣に蒞めるからである。故に若し長崎が海岸でなく、横濱が山の奥であつたならば、到底歴史に印すべき長崎たり、尙ほ將來ある横濱たり得られなかつたであらう。若し夫れ文明と河流との關係に至つては、世界の發展が「チギリス」及び「ユウ

五二四  
「フラチース」の河畔に始まり、埃及の文明は「ナイル」河畔に起り、  
印度の文明は「ガンヂス」及び「インダス」兩河の賜物であり、支那  
の文明は先づ黄河に始まつて、更に揚子江畔に起り、我が日本に於て  
は淀河の河口に大阪を開き、隅田川の河口に東京を起し、利根河口に  
常陸の文化を招き、伊勢灣と木曾川とに依つて名古屋あるに至らしめ  
しなど、地理風土の影響が文明に及ぼす所の甚大なるを見るに於て、  
又た吾等が個人として將た國民としての修養に影響する所の更に至大  
なるものあるべきは、敢て多言を要する迄もあるまいと思はれる。  
されば巍々たる山嶽の雄姿は、吾等をして剛毅の精神を養はしめ、澎  
湃たる海洋の波濤は、吾等をして寛大の雅量を馴致せしめ、熱沙千里

の亞刺比亞平原には、劍を以て宗教を擴むる「マホメット」を生み、  
滄海の孤島たる「コルシカ」より氣宇廣潤なる奈翁を出し、蒙古の平  
野に成吉思汗あり、喜馬拉耶山南に釋迦牟尼を生み、濃尾の平原に信  
長秀吉を出し、富士山麓の峽谷には武田信玄、紺碧の波を湛はせる日  
本海岸の北越には上杉謙信、衣が浦を抱ける三河には徳川家康、片し  
國の美し國なる伊勢の松坂には神風に因める國學の大家本居宣長、其  
の隣國の伊賀には松尾芭蕉、霧島山西の鹿城には西郷隆盛、鹿島香取  
の歴史的神跡に近き水戸には黄門光圀、藤田東湖を出し、金剛山下に  
は楠正成父子、相模灣に面せる鎌倉には相模太郎時宗、信濃の山奥に  
は佐久間象山、九州の東南端には日向洋の波を浴びて安井息軒、瀬戸



内海の風光を樂みつゝ、父祖の感化を受けたる頼山陽の安藝に出づるが如き、皆風土と偉人との關係を示さざるものはないのである。若し夫れ都會に商人多く、平野に農民多く、海濱に漁夫あり、山間に樵夫の住めるは、地理と職業の關係であり、太平無事の時代に於ける公卿の間には文弱の弊あり、戰國殺伐の時代に於ける武士には粗豪の風あるは、時代と人との關係であり、南方暖國の日向の住民は懶惰にして、雪に閉ざる北越の住民が貯蓄心に富めるは、氣候と住民との關係であるが、何れも皆自然の感化の人に及ぼすものたるは即ち一である。然らば則ち吾等の修養上に於て自然より受くる所の感化は、到底之を免がることの出来ないのは、必至の勢と言はねばならぬ。

そも／＼天地宇宙の大自然より、其の大自然を成せる小自然に至るまで、苟くも自然なるものは至公至平で、規律あり節序あり、虚偽なく虚飾なく、其の眞面目を吾等の面前に展開し、無限の趣味を興へて、無窮の眞理を教示しつゝあるから、松籟神韻を齎らして自然の音楽を奏し、白雲山巔を去來して自然の畫趣を現はし、野邊の草花心なくして笑み、梅が枝の鶯詩人をして頻りに思索せしめ、海河の水、天上の月、何れは皆無限の趣味を養はしめぬものとは無いのであるから、『風雅に於けるもの造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふことなし。思ふ所月にあらずといふことなし。像ち花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で

鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり』と俳人芭蕉が言ひけるやう、造化に従ひて四時を友とし、自然に接して風流を樂めば其の趣味禁ずべからざるものあつて、而かも至大至公にして規律あり節序ある自然の感化を受け、吾等が修養上に於ける大悟徹底の域に到達せんことも亦た決して難事ではあるまいと思はれる。

斯る自然を友として天地と同化する所には、鬱勃たる不平ありとも之を慰め、憎悪厭忌の念ありとも之を忘れ、常に心懷の快濶清爽を覺えて、眞理の示現に開悟の妙諦を得るは必然であるが、更に林檎の落つるを見て引力を悟れる「ニュートン」あり、波に漂へる萍草に大陸あるを知れる「コロンブス」あるが如きは、自然に對する觀察に依つ

て智能を啓けると共に、又た自然の教訓を得て悟る所あるに依るのである。田舎の青年は朴訥にして寧ろ粗野に近きも、都會に出でて風潮に揉るれば、圓轉滑脱の才子風に化するのは、人爲的社會の感化であるが、之れと同じく圭角ある山腹の岩石が、磯邊に轉げ落ちて波に洗はるれば、何時しか圭角を失ひて圓滑となるを見るであらう。更に急湍激流は岸を噛んで其の土砂を洗ひ流せども、巨大なる巖石は巍然として其の位置を變せざるを見るの時、輕薄才子が世の惡風に感染して墮落の深淵に押し流さるゝも、修養ある人物は志操堅固にして益々其の地歩を向上するに似たるを悟るであらう。斯の如く自然は吾等に無限の趣味を與へ、又た不言の教訓を示すものであるから、自然に接す

ること多きに從つて、吾等が修養に裨益する所も亦た益々多き所以である。

されば旅行は一面に自然の趣味を感得し、其の不言の教訓を受くると共に、一面には世態人情の變化に接して、見聞を廣くし經驗を富ますものであるから、見聞に依つて修養を積むことは旅行に若くものはあるまいと思はれる。即ち『世間見ず』と言ふ詞は、頑固偏強の者に對する評語で、井戸の蛙の自から大なりとする者には、到底井戸以外の天地を知ることが出来ないものである。奥山の山人は鹽焼く海人の生活を知らず、北海の熊は南洋の鰐を知らず、燕雀は遂に大鵬の志を知らざるやうに、一村を出でざる智者は一縣の智者たる能はず、一縣を

出でざる學者は世界の學者たる能はざるは論ずる迄もない。假令蛙は到底蛙たり、燕雀は到底燕雀たりとも、少くとも井戸を出でて沼澤湖池あるを知り、或は大鵬の志を學ばずとも、隼鷹の害を免るるの智あらんことを望まねばならぬ。此の點に於て修學旅行の必要を認めると共に、又た視察巡回の有益なるを主張するのである。殊に山間僻地の學生、教職員、町村吏員、實業者等が、自己在住の町村郡縣よりもより以上に發達しつゝある都邑に向つて視察旅行を爲すに於て、其の旅行は益々有効である。併し之をして有効ならしむると否とは、一に其の人の觀察力、研究力、熱心不熱心の程度如何に依ることは勿論であるが、其の人のみを見て視察旅行其のものゝ裨益を度外に置き、或

五三二  
は教師の指導の良否に依つて修學旅行其のものゝ有害を唱へるなどは固より本末を顛倒せる僻説である。隣縣の教育状態を知らぬ教師に其の兒童を託せる父兄は、果して満足の意を表するであらうか。甚だしきは隣郡隣村の状態を知らぬ教師が、傲然として教鞭を執りつゝあるのを目撃し、宮城縣と宮崎縣とを混同し、安房と阿波とを取り違へながら、恬然として耻ぢざる先生が地理科を受持つたりなどしてゐるのは、兒童の爲めに餘りに幸福でもあるまいと思ふのである。要するに百聞一見に若かずと言ふことは旅行の本旨と其の裨益を説き得て妙なるものであるが、未だ一聞だにせざる者に至つては、一見を以て百聞に代ふるの利益を得られる譯である。昔は日本より支那に留學して

其の文物典章を齎らし歸り、今は支那より日本に留學して續々人物を輩出してゐるなども、亦た廣義に於ける旅行の結果である。されば印度の文明は亞歷山大王の征伐旅行に依つて古代の歐洲に輸入せられ、日本人の歐洲旅行は泰西の文明を日本に輸入し、彼我の交通益々盛なると共に精神的に物質的に其の文明を交換するに至つて、茲に世界の發達進歩を促すのであるから、之れを小にしては個人の旅行が、自然に接觸するの多きと、世態人情の見聞を廣くするとに於て、其の修養に資する所の莫大なるは敢て贅言を費す迄もないことである。旅行に反して坐ながら見聞を廣くし、良師良友に交るを得るものは讀書である。故に某氏の家庭を尋ねて藏書の多少を一見すれば、概ね其

の家長の修養の程度を察知することが出来る。徳川時代の三百諸侯の中でも、雄藩には必ず蔵書が多い。又た蔵書の多い雄藩からは必ず多数の人物を輩出してゐる。今日に於ても貧弱なる小縣の圖書館には、蔵書も貧弱であり、閱覽人も少数であつて、其の縣の教育は甚だ振はないのを目撃する。之れと同じ道理で日本一の都會たる東京には日本一の圖書館があり、又た人物も學者も總べて雲集してゐるやうに、世界の都會には世界の大圖書館があつて、世界的の人物學者が雲集してゐるのである。翻つて之を現今の我國に於ける府縣郡村に就て見ても書物を多く讀まぬ地方ほど人文の程度が遅れてゐるのは事實で、中には新聞さへも見ない村民が甚だ多いのであるが、さう言ふ地方にな

ると全く山中厝日なしで、太古の時代その儘に無爲にして化しつゝあるのは結構としても、謂ゆる無智文盲の極で、社會の進歩も知らねば何の爲めの國家たるも辨へず、又た自己は何の爲めに生き、何の爲めに食ひつゝあるかも知らぬ瀾れさに至つては、其の實地を目撃した者でなければ到底信を置かぬ程の有様で、跣足を常習とし、半裸體を遺傳とし、其の言語は謂ゆる南蠻缺舌、酒に酔へば亂舞狂態、之れが本島内地の同胞であるかと疑ふ計りの地方もある。此等の地方に往つて其の状態を目撃すれば、願くは何等かの方法を以て書物を讀ませて、或る程度迄の修養を積ませたいものだと切に感ぜざるを得ないのである。

併しなから短智低能なる者は暫らく別として、更に一步を進むるならば、書物は讀むべきものであつて、書物に讀まるべきものでないと言ふことを注意せねばならぬ。尤も書物にも有益なるものと有害なるものがあるが、其の區別は常識の判断に依つて一目瞭然であるから、苟くも修養に資せんが爲め、若くば研究に供せんが爲めに、書物を選択する程の者が、一見して思想に害あるか風教を紊すものなるかの區別が付かぬ筈はないから、茲には有益有害の問題に就ては多くを説く必要もないのであるが、其の有益なる書物と雖も、一にも二にも書物に信賴し、其の所説を妄信することは多くの場合に於て禁物である即ち書物に讀まるなかれと言ふのは此處の事で、其の書物に讀まる

る時は其の書物に偏して、他の學説を容るることが出来なくなるから偏狹に失するの結果は智能の發達を妨げることになる、即ち書物を讀んだが爲めに却つて退歩したと言ふやうな反對の現象を呈する虞れがあるから、及ばずとも常に批評の眼を以て書物を讀むことが肝要である。孔子の説でも基督の言葉でも釋迦の教へでも更に差支へはないから、宜しく批評眼を以て讀みつゝ研究し、又た研究しつゝ讀むのが即ち讀書の上乗なるものである。

凡そ書物を讀むには四種の目的がある。一には學問研究の爲めに讀むもの、即ち主として自己研究の専門的學科に關するもの。二には常識養成の爲めに讀むもの、即ち主として時代智識の修得を目的とするもの。

の。三には品性修養精神錬磨の爲めに讀むもの、即ち主として聖賢の遺書英雄偉人の傳記の類。四には趣味娛樂の爲めに讀むもの、即ち主として文藝に關するもの。斯う言ふ風に四種の目的に分類するとは言へ、何れも皆修養に資せざるはないのであるが、中にも聖賢の遺書、英雄偉人の傳記の類は、最も直接に品性の陶冶精神錬磨の好資料であつて、一たび此等の書に對すれば即ち聖賢と膝を交へて語るの感あつて、一言肺腑を貫き、一句胸底に浸徹し、雜念忽ち拂ひ去られて心鏡俄に明なるを覺えるのである。是に於て我に反省を促し、我に奮起を説く、此の時須らく沈思黙考して既往を顧み、更に將來の修養に想ひ到らば、少くも聖賢に近づくこと一步なるを得るであらう。是れ實

に人生の快事ではあるまいか。或は英雄の傳記、或は偉人傑士の事蹟富豪の立身傳等を讀みて、其の波瀾ある生涯、立身成功の奮闘の跡、國家社會の爲めの犠牲的行動、偉業成就の經歷、并に其の高潔なる人格を偲ぶの時、吾等は其の一舉一動に依つて啓發せられ、一進一退に依つて指導せられ、身は書中にあつて偉人傑士と事業を共にしつゝあるが如きの感想を抱くと同時に、覺えず知らず向上の一路を辿りて、一步又た一步、其の偉人傑士に近づきつゝあるのである。斯の如く吾等は常に聖賢と相對して其の金聲に聞き、史傳を繙いて偉人傑士と交はること屢次なれば、習慣は第二の天性と爲つて、其の修養の効果は遂に聖賢偉人たるに近き的人格を作さしむるに至るは必然

である。併しながら此處に最も注意を要することは、唯だ金聲を聞き  
て之を知り、史傳を繙いて事蹟を見るのみでは、未だ修養の目的を達  
したとは言へない事である。即ち其の知る所を行ひ、其の得たる所を  
實にせざるに於ては、折角の修養も全く徒勞に屬せざるを得ない。併  
し其の知る所を直に實行することは甚だ容易の業ではないから、吾等  
は又た此處にも習慣の必要を説かねばならぬ。吾等は常に煩惱の爲め  
に心靈の光を蔽はれ、物慾の爲めに執着せられて眞我の指導を誤り、  
良智良能も之れが爲めに曇りて、動もすれば向上の一路を失ひ、仍て  
以て岐路に迷はんとするのであるから、即ち奮勵一番、煩惱を斥け物  
慾を制し、寸前尺進迷霧を排き行くの習慣を作れば、曾て改め難かり

し悪習も容易く除却し、痼疾たりし悪癖も何時しか治癒せられて、前  
の難事は今の易事たるに至らんことは必然である。即ち良習慣を養  
成せんには、先づ其の初に於て翻然として善に向ふの『發心』を要し  
既に發心すれば之を實行するの『決心』を要し、既に決心して實行に  
着手すれば其の實行の『持續』を要する。而して之を持續するには非  
常に鞏固なる意志を要するのであるが、併し初めて事を行ふの難きは  
恰も大石を動かすに等しく、一たび之を動かし始むれば又た敢て難事  
でもないのである。即ち習慣も之を作るの初めに於て頗る艱苦を感ず  
るには相違ないが、一たびは十たびより、十たびは百たびより、度重  
なるに従つて何時しか艱苦を忘れ、其の習慣は第二の天性として先天



偉人の修養

水戸黄門  
能く人言  
を容る

的稟性と融合し、以て高潔偉大なる人格の光輝を發つに至るものである。故に修養は良習慣を得て全く、良習慣は修養を待つて作らるゝ所である。されば誠實廉直の習慣、小事を忽にせざる習慣、規律嚴守の習慣、時間勵行の習慣、堅忍自彊の習慣、約を守り信を破らざるの習慣など、皆是れ吾等が日常に於ける修養上必須のものである。今夫れ偉人の修養を見るに實に用意の周到にして、微細の點に至るまで之を等閑に附せざるのみならず、能く人言に聞きて己の足らざるを補ふに吝ならざるに至つては、洵に敬服せざるを得ないのである。彼の有名なる水戸黄門光圀は常に東西に遊歴して、民情を察し賢者を求むるを樂としてゐた人であるが、或る時旅亭に憩ひて不圖一双の屏風

に目を留めて見ると、其の描く所凡筆でなく、風韻掬すべきものがあるので、正しく土佐光信の筆と鑑定しながら、偕て侍者を顧みて言ふには此の畫は決して凡筆ではないが、松に雁を添へたるは杜撰も甚だしい。斯くては畫にあらすして墨を塗り着けたるに過ぎぬものであると、其の聲稍高かつたのを聞き取つた傍の一旅人は、却つて松に雁の構想の妙を賞歎して措かないので、光圀卿之を訝かしみて其の由を問はれたるに對し、彼の旅人は恐懼謙讓の態にて容姿を正して答ふるやう、下賤は一介の商人、固より繪畫を解する者ならねど、松に雁の此の畫は『秋わたり春歸り行く雁も羽休めせん函館の松』と詠み給へる冷泉天皇の御製に倣へるものと覺えし、下賤が賞歎せしは即ち此處な

りと申せしかば、光圀卿慚愧に堪へず、彼を座に引きて其の姓名を問はれたるに、彼は當時豪奢を以て闕所されたる淀屋辰五郎であつた。嗚呼黄門が一代の名君として盛名を天下に恣にしたのは、微賤の輩をも退けずして能く人言に聞き、以て自己の足らざる所を補へる結果と言はねばならぬ。

碩儒伊藤仁齋は京都の堀川に於て諸生に教授し、其の門人甚だ多かりしが中に、常に酒色に耽溺せる遊蕩生があつて、彼は師を欺いて花柳の巷に出入すること數知れず、遂に其の辭に窮したる後一策を案出し一夕殊勝らしく師の前に進み出で、母久しく病床にあつて命旦夕に迫り、願くば今夕小閑を得て看護の任を盡したし』と乞ふがまゝに、

母の病氣とあれば何事を措いても早速行きて様子を伺ふべしと許したのを、彼は妙策成れりと打ち喜び、直に遊里に馳せて沈醉多時、夜既に二更に及んで漸く歸り來つたのであるが、何ぞ圖らん仁齋は袴を正うし威儀を整へ、手燭を携へて彼の歸來を玄關に待ち受けながら『母の病氣は如何なるぞ、歸宅の遅きがまゝに殊の外案じ煩ひたり、次第に快方なりや、様子は如何に』と問はるゝ程に、彼は懺悔に堪へ難く、涙を流して告ぐるに實を以てし、深く其の罪を謝すると共に爾來篤實勤直の書生となるを得たと云ふことであるが、是れ即ち仁齋が其の門人を導くに言を以てせずして身を以てしたもので、斯の如きは修養を積むこと深き者でなければ到底行ひ得ざる所である。

柳澤淇園は常に「堪忍」の二字を守つて之れが修養に勉め、其の鍛錬を淀川の夜船に於て試みるのが常であつた。當時京都大阪の航通は淀川の夜船に依つたもので、種々雑多の老幼男女の乗合であるから、膝を折り、脚を縮め、人の足を枕とするもあれば、人の頭に足を乗せるもあつて、睡らんとすれば揺り起され、微睡むと思へば舳に目さめて起きて寝ても心のまゝならず、假令疊一枚の家に住むとても、斯る乗合船には遙かに優る所があるから、乗合船の不自由を思へば如何なる堪忍も出来るのであつて、一夜の堪忍も尙ほ生涯の堪忍に齊しかるべしとは、實に淇園が修養の本旨であつたのである。

柳生宗矩は劍道に於ける天下唯一の達人で、將軍家の師範役として飛

ぶ鳥を落さんず勢威があつた。然るに或る日一人の托鉢僧が其の門前に立ち止つて、御師範役などとは嗚許の沙汰であると聲高く罵るのを聞き咎めた門番は斯くと宗矩に告げたので、宗矩其の僧を座敷に呼び入れ、彼が心憎き嘲弄を含みつゝ、偕て足下は何流を修行されしやと問へるに、澤庵笑つて答ふるやう、貴殿は天下の御師範役とは言ひながら、劍道は極めて下手なりと覺えたり、そも劍を使ふに何の流儀があるべきぞ、流儀は末なり極意にはあらずと言へば、宗矩思ふやう、此の僧如何ばかりの實力ありて斯る高言を吐くにや、立會ひて試し見んとて伴ひて道場に入り、木太刀を取つて立ち上り、足下は何を持たるゝやと問ふに、澤庵泰然として吾は出家の身、持つべき物もなし、

速に何れよりも打ち込まれよと、道場の中央に突立ちたるに、宗矩打ち掛らんとすれど間隙もなく、宛然盤石のやうであるのを見て、流石の宗矩も感に入り、智徳優れし聖僧かな、物に動せぬ心法こそ教へ給へとて、爾來禪學を修めて心膽を鍊つたと言ふことであるが、澤庵も偉い、宗矩も亦偉いではないか。靈魂不滅論を著はして名を世界の學界に轟したる「サムエル・ドリエール」の幼時に於ては、實に濟度すべからざる惡童で、群童の首魁として竊盜密賣を事とし、長じては漂浪無頼の惡漢となり、酒色に耽溺して他事を顧みず、遂に海賊たらんと欲して不慮の厄難に遭遇し、僅に他人の救助を受けて其の一命を全うしたのであるが、爾來翻然とし

悔悟すると共に、一念善行を志し、初めは靴職工と爲りつゝ餘暇を以て學業に身を委ね、貧窮を厭はず艱苦を避けず、妻の針箱を机とし、臺所を書齋に代へ、遂に一大著述を成就して世界の學者を驚かすに至つたのである。彼れ晩年に至り當時を追想して『讀むに従ひて自己の愚を覺り、自己の愚を悟るに従ひて精力量すく加はり、瞬時も讀書を廢せざれど、閑暇なき職業に身を委ねつゝあるものから、食事中と雖も常に讀書を怠らざりき』と言つてゐる。斯くて無頼姪蕩の惡漢は歐洲哲學界を驚倒すべき一大著述を成功したのであつた。一念悔悟の結果、奮勵研學の賜物の至大なること斯くの如きは、採つて以て世の青年子弟の龜鑑とすべきではないか。

「ウイリヤム、ピット」の堅忍

英國の大宰相として令名高き「ウイリヤム、ピット」は、剛愎と思はるゝ程の膽力があつて、其の堅忍能く衆に秀でてゐた人であるが、或る時總理大臣たる者に要する性格に關して種々の議論が出て、或者は雄辯を主張し、或者は智識なりと言ひ、或者は勤勉、或者は勞苦と論じ、甲論乙駁、其の議の決せざるを靜かに聞き居たる「ピット」は、徐ろに口を開いて、總理大臣に要する性格は唯だ夫れ「忍耐」なりとの一言。之れが生來未だ曾て顔色を變へたことのない忍耐強き「ピット」の口から出たのであつた。

「アーノルド」博士の修養

英國近代の教育家にして詩人たる「マシウ、アーノルド」の父なる博士「アーノルド」は、教育者の權化として尊奉せらるゝ人であるが、

曾て低能なる一生徒の餘りに理解力の鈍さに堪へ兼ねたる博士は、辭色を勵まして其の生徒を叱責したるに、生徒は博士を見上げつゝ「先生よ、左まで激しく仰せ給ふなかれ、自分は是れにて一生懸命の努力なるものを」と言ひぬれば、博士は翻然として慚悔の念禁じ難く、自己の克己力の足らざるを顧みつゝ、暫らく默然として想ひに耽つてゐたが、是れぞ博士が克己修養の動機であつた。後年人に語つて「予は生涯彼の生徒の顔色と言葉とを忘れ難し」と言つたとかや。博士の如きは即ち能く機會を捉へて自己の修養を怠らなかつた所の好模範である。

英國の文豪として歴史小説の泰斗たる「サー、ウォーター、スコット」

は、壯大なる邸宅を構へて、華美なる生活を送りつゝある中、書肆「  
コンランスターブル」社の倒産と共に、彼が實際の責任にあらざる十  
萬磅を法律上から擔任せざるべからざる運命となつたが、債主は其の  
事情を知つて之を要求するの意志を持たない。併し義務觀念に深き彼  
は、家具を賣却し、財産を債主に付し、忽ち赤貧の身となつて而かも  
中風症に悩みながら、一意創作に従ふこと四年、斯くて負債の三分の  
二を償却したのであるが、既にして病篤く又た筆を執るを得ざるに  
至り、一日庭前の芝生に椅子を据ゑて靜かに日光に曝されつゝある時  
突然椅子を離れて「噫是れ怠惰なり、誰か來れ、余を書齋に運びて文  
臺の鍵を持って」と言ひつゝ、懸て書齋に運ばれ、原稿紙を展べて筆を

握らしめられしも、終に一句を下すに由なく、無念の涙其の頬を傳は  
りながら、間もなく此の世の別れを告げたのであつた。嗚呼屈辱を忍  
ぶ能はざる索邇人の意氣、理由なき恩恵を受けざる武士的精神、義務  
を重んじ體面を尊べる性格の高潔さは、實に此の人に於て見られるの  
である。

獨逸の「マルチン、ルーテル」の敢行したる宗教改革の先驅者たるボ  
ヘミヤの「ヨハネス、フツス」が教義人道の爲めに殉せる悲壯敢爲の  
生涯は、能く精神の修養を積める光輝ならぬはない。早く父を失ひて  
母と共に田舎に住んでゐたのであるが「ブラーグ」大學に入るに及ん  
で學識衆に擢んで、年尙ほ三十に満たずして同大學の學長となつた程

の秀才で「ブラーグ」市の「ベツレヘム」教會の傳道を掌り、熱烈に信仰を鼓吹すると共に、羅馬法王の暴肆、僧徒の驕奢、教會の專横を責めたが爲めに、法王の怒りに觸れて其の説教を禁じられたのを「ボヘミヤ」の王室と國會が調停の勞を執つて一時事なきを得たのであるが、法王「ヨハン」十二世が十字軍を召集し、從軍者には地獄に於ける一切の罪を許すべしとの法令を出せるに對し、彼の義憤は再び發して之を攻撃するに至つたので、法王は遂に彼を獄に投じ、七ヶ月の間呻吟の憂き目を見せて、而かも有らゆる威壓囑嚇を加へ以て、其の異端を翻さしめんと試みたのであるが、彼は異端に非ずとして毅然として之を斥け、余が説く所若し聖書に違ふ所あらば喜んで自説を

捨つべく、聖書の尊嚴の爲めとならば、喜んで一命を抛つべし、而かも法王及び教會は終に我を何するものぞと、寸言金鐵を徹するの概があつたが、惜むべし終に火刑に處せられ、四十二歳を一期として其の形骸に終局を告げたのであるが、彼の志を承けたる者に「ルーテル」あり、以て宗教改革は斷行せられ、道の爲めに殉じたる彼の光輝は其の人格と共に今尚ほ世界に生存しつゝあるのである。

大聖「ソクラテース」は希臘の雅典に生れ、父は彫像師、母は産婆で家計の裕ならざるが爲め彼は僅かに普通教育を受けたのみで、多くは彫刀を手にして父の業を助けてゐたが、壯年にして軍に従ふこと三たび、此の間彼の堅忍剛毅なる性情と勇敢なる武名との傳ふべきものが

ある。時恰も嚴冬に際し雪大に降りしきりて兵士苦寒に惱めるに、彼は薄衣跣足にて雪中を奔馳し、毫も苦痛の色を現はさず、酒を飲まず、飢餓を意とせず、又た曾て夏日陣營の前に佇み、靜かに哲理を冥想して朝より夕に、更に夜を徹して翌朝に至つたこともある。殊に「ブラトーン」、「アルキピアデス」及び「クセノバニーズ」の負傷したるを救ひし勇敢なる行動、沈着なる態度は、實に陣中の佳話として知られた所である。斯くて三度の戦争を経たる彼は選ばれて評定官となり司法官となり、終に元老院議長となつたが、常に正義と剛毅とに依つて徳義を行ひ、全議會に反對して自己の信する正理を敢行し、明確なる知識を以て社會百般の事を處理したのである。而かも彼の真相と其

の人格とは彼が野に下つての後に於て發揮せられ、青年渴仰の中心となるに至つたのであるが、其の弊衣跣足、恬淡寡慾の風采は、却つて人をして崇高の念を起さしめ、其の思想の堅實高尚、其の談論の熱烈眞摯は、一たび彼に接する者を教化せしめずんば止まない。常に曰く各人其の意見を異にすと雖も、其の異中に同を求めて一致するものあるは是れぞ眞正の知識、眞實の自體であるが、此の眞正の知識に到達せんが爲めには常に吾人の精神を清淨ならしめ、虚偽に満ちたる慾念を拂ひ去らねばならぬ。さは言へ吾人の急務は、天地自然の眞を知るに先だちて、自己自身を知らねばならぬと説いてゐる。即ち朝に道を聞きて夕べに之を行ふと言ふのが彼の哲理の入門である。斯くして彼



は雅典市民を導くべく努力したのであるが、而かも謙讓の美德を以て人に接し、常に春風和煦たる胸襟を開き、友人に對しては極めて深切友愛、慈言、慰藉、温情を捧げたのである。されば其の門下より濟々たる多士を出したのも亦た故あるかなである。中にも「プラトーン」と「クセノハニス」とは其の高弟である。

孔子の門弟三千人と言はれてゐるが、之れにも劣らぬ「ソクラテース」の門人は、一代を指導すべき青年より、兵士、商人、職工に至るまで、雅典全市に洽ねく、恰も衆星の北辰を中心として廻轉するが如きの觀がある。當時雅典の政治は腐敗して、奸人私曲を恣にし、外は他國の侮辱を受くること再三に止まらないので、彼は常に之を嘆じ、

國民の體力を強健ならしめ、國境の守備を嚴にし、以て舊時の盛勢を挽回せしむべく、頻りに政弊を痛論し、民心を鼓舞し、先づ自から體操法を行ひて體力を鍊り、市民を集めて處世の要道と徳義の躬行を説くこと二十年一日の如くであつた。是に於て雅典政廳の慊忌する所とな爲り、遂に異神の崇拜、希臘の瀆神、人心を腐敗せしめたりとの理由を附して獄に投じ、以て死刑を宣告したのであるが、彼が獄中にあつて、雅典市民に告ぐるに『余にして若し人心を腐敗せしめたりとせば汝等の欲するまゝに余を遇すべし、余は幾回死に處せらるるも道を變へざるなり、死は恐るる所に非ず、往いて古の英雄と物語らん、現在も未來も善人に對して惡の來る筈なく、神は到底善人を棄てざるなり』

と言ふことを以てした。實に凜として千古に、獨歩するの概がある。斯くて死刑の時に至り彼は多數の門弟に圍繞せられつゝ、獄吏が齎す所の毒杯を仰ぎ、絶代の偉人「ソクラチース」は七十二歳を以て最後を遂げたのであるが、其の性行は二千年後の今日、益々光輝を發ちて彼が哲理は今尚ほ學界の權威を爲してゐるのである。北米合衆國の宇内に雄飛せる今日あるに至りしを知るものは、又た必ずや「ジョージ・ワシントン」の名を記憶するであらう。彼の父は「オーガスチン」と言へる温厚篤實の紳士で、神を敬し人を愛し、専ら農耕に従事してゐたのであるが、「ワシントン」は其の二男で、一兄三姉と弟妹五人と併せて十人の兄弟であつた。彼が十三歳の時父は歿

し、謹直淑徳の聞え高き母「マリーボール」は、己が一手に十人の子女を教養することになつたのである。然るに當時北米に於ける英國殖民地の教育は極めて幼稚であつたが、彼れ「ワシントン」は幼時よりして眞率謹直、彼が筆記せし帳簿の如きも體裁甚だ精細を極め、又た多く道徳上の格言を拔萃して修養に資し、克己制欲の習慣を作るに努めたことは、其の年少にも似ず實に敬服に値する。且つ彼が自ら「言行の規律」と題して朝夕の箴とする所を見るに「自己の名譽を重んじ、上品なる人と交るべし。悪友と交るよりは友なきに若かず。人を責めんとせば、自ら非難さるべき態度あるべからず。博識の人に向つて贅言するなかれ。無學の者に對して大言壯語すべからず。自己に必

要なき他人の事を知るべく勉めざれ。人の陰言を言ふなかれ。人に談話するに當りては先づ其の問題の善悪を考慮せよ。言行は常に良心に恥ぢざるを要す』など、十四五歳の少年としては其の修養の工夫の如何に周到なりしかを驚かすには居られない。殊に彼れが細事も忽にせずして而かも可憐親切なりしことは、彼が小學卒業の後測量術を學ぶこと二年にして、其の實地練習の爲めに原野の測量を爲せし時に於て早くも其の眞髓を發揮し、精細に之を測量し、可憐に之を手帳に記入すること、恰も自己の所有地に於けるが如く、學友の冷笑を耳にも懸けずして其の全力を盡せるは、聽て將來大國を経綸するに當つての可憐親切精細周到、而かも規律ある大道を行ひて疎放に流れざりし

を證するに餘りがある。且つ彼が忍耐力の強大なることは『アレガニ』山中の測量に於て發揮せられた。其の測量地域は數十哩に亘りて大澤あり、深林あり、谿谷あり、時に瘴猛なる蠻民の襲來あるにも拘はらず。彼は勇氣と忍耐とを以て此の艱難に當り、深く蠻地に入つて測量に従事し、藁を布きて床とし、一枚の毛布を纏ひて露宿し、辛酸多日以て其の事業を遂行したのであるが、將來獨立戰爭に於ける勇氣と忍耐と克己とは、既に此時に於て早く證明せられてゐたのである。彼が公生涯の第一歩は其の二十歳より二十八歳に至る間で、故國の爲めに攻城野戰に従ひて粉骨碎身したるに始まる。即ち「ウキリアム」戦争「アン」女王戦争「ジョージ」王戦争は夫れである。殊に米國獨

立戦争に於て「バトリック、ヘンリー」が「我等に自由を與へよ、否  
 らずんば死あるのみ」と絶叫せる時、彼は衆望を荷ひて將軍の印綬を  
 帶び、一身を自由の犠牲として七年間の激戦を繼續し、戦敗れて困難  
 起れば總べての責を己れに負ひ、戦勝つて功績の擧るあれば總べての  
 名譽を兵士に歸し、戦費不足して俸給を受けざる彼は、尙ほ兵士を激  
 勵するに「米國は一に諸君の努力に負ふ」との言を以てし、遂に自由  
 の光榮を神に捧げて、米國の獨立と平和を確立し、第一次大統領とし  
 て偉大の功績を傳へ、而かも遂に帝王たるべきの請告を斥けて再び田  
 園の間に起臥せる高潔なる人格は、今にして益々萬人の瞻仰する所で  
 あるが、是れ實に幼時よりの修養の致す所に外ならぬ。

歐洲に於ける第十七世紀の末葉より十八世紀に於て、獨逸の思想界は  
 新舊兩思想の混亂期であつて、偏見と突進と固陋と感情と錯雜混淆し  
 て捕捉すべからざる時代であつた。「ゲーテ」は實に斯る時代に於て  
 「フランクホルト」の富商の家に生れ、幼よりして早く非凡の詩才を示  
 してゐた。父の性格は嚴烈にして寧ろ冷淡であるが、而かも廉直を重  
 んじて、眞理を愛し、知識を求むること飢えたるが如きものがあつた  
 母は快活誠實にして感情に強く、却つて或は放縱談話の傾向があつ  
 た。「ゲーテ」は實に父の精神を受けて眞理を探索し、母の性情を受け  
 て燃ゆるが如き情熱を有してゐた。併し富家に生れた貴公子育ちであ  
 るから、窮乏と艱難とを知らない丈に、意思の堅實を缺いてゐたので、

彼は能く自己の缺點を洞察し、常に意思の鍛錬に其の力を注いだのであるが、此處が即ち彼の非凡なる所で、自己の缺點を認識して之を修養し、以て其の圓滿を期すべく一生を擧げて努力せる彼の如くにして始めて偉大なる人格を完成し得るのである。

彼が飽くことなき知識の要求は早く幼童の時より現はれ、未だ満八歳ならざるに日耳曼、佛蘭西、伊太利の三國語を知り、且つ希臘及び羅甸の古文辭をも解し、十二歳の頃より數學、繪畫、音樂を學ぶと共に又た邦語、猶太日耳曼語「ベブリユ」語をも譯讀するに至つた。十六歳の秋「ライプチヒ」大學に入りて哲學と法理を學び、當時の謂ゆる混亂思想の渦中に投ずることになつたが、燃ゆるが如き天真の感情は

忽ちにして心理的發展を促し「予は神と世界とに就きて我が大學教授の知れる如くに知るに至れり」と放言して、爾來大學の講座に出席せず、或は醫學生の會合に臨み、或は繪畫を學び、彫刻を學び、遂に憂鬱偏短の性情を高めて、麥酒の痛飲に其の鬱を散せんとし、端なくも放縱生活に陥つたのであるが、其の結果一夜咯血して危篤に瀕し、褥中にあつて煩悶を續けてゐた際、圖らず友人の忠言に依つて聖書を耽讀し、爲めに偉大なる印象を與へられ、是より道德的修養に入るに至つたのである。

彼は僅に其の健康を恢復するや、更に鍊金術を學び「ストラスブルグ」に往つて法學を修め、其の怪想的鬱憂症は、自殺の感想を益々強から

しむると共に、又た其の知識要求の念に驅られて、古今東西の自殺論及び其の方法の研究を始むるに至り、各種の材料を蒐集すること凡そ二年の後、彼は幾たびか思ひ立ちたる自殺に對して『自殺は到底偉大なる精神と自由とを求むべき道にあらず、之を求めんが爲めに自殺するは之を失ふものなり』との解決に到達したのである。斯くて彼は新居を「サアル」河畔の「ヴァイマル」に營み、山河古城の風光の中に後半生を送ることとなつたが、其の地の清麗明媚なる山水は此の情熱の詩人に第二期の修養を得せしめ、夢想の世界を脱して現實の世界に入らんとし、思想正に一變せんとするの傾向を示せるに當つて、彼の多年の宿望たりし伊太利旅行の途に上つた。此の旅行こそは實に彼の

新誕生とも言ふべく、藝術傳奇の興趣に満てる古の羅馬は、彼をして科學研究の精緻の域に達せしめ、彼の自覺をして圓熟ならしむるに至つた。されば彼が羅馬を去りし時「ヴァイマル」侯に呈せし書に、伊太利旅行の目的は『予の無用の人物たらんとせる形骸上及び道徳上の不安より脱することと、且は美術に對する多年の渴仰を癒さんが爲めなりき。而して前者は未だ全からざるも、後者は成功せり』と言つてあるのを見ても、伊太利旅行が如何に彼をして新生涯に入らしめしかを知るに足るであらう。此の旅行より歸來したる彼の彼は、詩人「シルレル」を友として史上稀に見るの交情を結び、其の最後の傑作「ファウスト」の如きも「シルレル」の刺激に依つて完結を告げし程で、

彼が最後の修養は實に「シルレル」との交際にあつた。要するに彼が生涯の事業は、眞理の基礎と生命の源泉を發見して、之を體得せんが爲めの努力であつた。同時に自己の缺點を認識して堅實なる意思を作らんが爲めの努力であつた。而して彼は其の死に至るまで眞理の追求と意思の充實とに就て満足しなかつたのであるが、彼の偉大なる所は即ち此處にあるのである。

故國を失ひて四方に流寓し、信仰の壓迫を受けて忍苦に泣ける猶太人の西班牙にある者が、新に西班牙の羈絆を脱したる和蘭に移住してより四十年の後「アムステルダム」の猶太人中に生れたる一異才こそ「バルフ、スピノーザ」其の人である。當時和蘭は信教の自由を許し、

異教者に對して迫害を加へなかつたから、此處に移住せる猶太人は、教堂を建て、學校を起し、自由に故國の宗教を奉じて、廢れたる信條教義を復興するに努めたのである。此時に當つて生れたる「スピノーザ」は幼よりして學才を有し、十五歳にして既に猶太教の經典を修め將來高名なる經典學者たるべく囑望されたのである。斯くて彼は少年をして羅甸語を學ばしめざる猶太人間の禁を破り、秘に醫師「エンデ」に就きて羅甸語を學ぶと共に、學術の蘊奥を極めんとする哲學的頭腦に依つて「デーカールト」及び「ブルーノー」の著書を読み研究し其の眼界を大ならしむるに至つたのであるが、是れぞ彼が猶太教の狹隘なる思想に不満を抱き、耶蘇教中の一異端と目せらるる「コレヂア

「ン」教徒と交りを結ぶに至つた原因で、儀禮經學に重きを置かずして専ら信念の發露を尊び、純朴高潔なる信念を樂むやうになつた。是に於て彼が信仰の動搖に驚きたる猶太教徒は、彼に年金を與へて異説を唱へざらしめんとしたのであるが、彼は金錢を以て自己の信念を抛つを肯んせず、頑として之を斥けたので、今は是れ迄なりとて猶太教徒は彼を街路に要して暗殺を企てたのであつたが、彼は七首の爲めに外套を破られたのみで、其の生命は無事であつた。併し危難は刻々に其の身に迫れるを知る彼は、二十三歳の七月「アムステルダム」を逃れて、其の近郊なる「コレチアン」派の友人に身を寄すると同時に、猶太教會は彼を異端者として放逐式を行つたのである。

猶太人の爲めの柱石たるべしと讃へられたる彼は、今や猶太人の敵として天涯放浪の孤客となつたが、彼は困苦艱難の爲めに自己の信念を抛つが如き薄志弱行の人ではなかつた。放浪の後の彼は、一たび「リンスブルグ」に移り、二たび「ハーグ」に移り、眼鏡磨きを職として日に拾錢の糊口に甘んじ、米鹽全からざる窮乏の間に處して熱心に「デカルト」の哲學を研究し、遂に匿名を以て「トラクタートス、ポリテイコス」を版行し、哲學と宗教との相異なることを唱道すると共に宗教の自由を主張したのである。此の新説は當時の神學者及び哲學者に對する晴天の霹靂で、頗る物議を醸したのであるが、宗教會議は異端邪説と斷じ、政府は其の印行發賣を禁じて、幾多の秘密出版は行



はれ、名稱變更の下に流布せられて、到底之を壓抑することが出来なかつた。斯くて彼の名聲が四方に傳播するに及び「ハイデルベルヒ」大學は彼を聘して教授たらんことを請ふたが、専心研究に従へる彼には、教授の職は半錢の價値もなく、彼は之を謝絶すると共に舊に依つて一民家の二階住居に甘んじ、眼鏡磨きを職としつゝ一代の名著「エテイカ」の執筆に餘念がなかつたのである。其の篤學にして黄金に屈せず、困頓に處して名聲を求めざること彼が如きは世甚だ稀である。斯くて彼は痼疾の肺患の爲めに千六百七十七年二月、年四十四を以て彼の謂ゆる宇宙の本源たる神に歸したのであるが、死後に遺りしものは數冊の書籍と、寢臺一つ、机一つ、并に彼が生活の最も大切な記念

王陽明の  
性行

たる磨き終らざる數個の眼鏡の玉のみであつた。彼の死後一百年、獨逸に「レツシング」出でて始めて彼の眞價を認め、更に「ゲーテ」「ノワリス」「シユライエル、マツヘル」等の學者を俟つて、百世に動かざる彼の眞價を歐洲思想界に傳播するに至つた。是れ實に彼が篤學の賜物に外ならぬのである。文人の性格は其の作品に現はれ、哲人の性格は其の學說に流露す。されば哲人王陽明の性格は如何に、陽明は浙江省紹興府の形勝の地に生れ、地理風物既に偉人を出すに適せるが上に、其の家は世々豪傑を輩出したる歴史を有つてゐる。されば陽明は十一歳にして既に詩賦に達し、蛇は寸にして人を呑むの概を示してゐた。年十四にして心を兵法

に留め、當代に於ける儒者が徒らに詞章を以て太平を粉飾するに過ぎざるを嘆き、孔子の謂ゆる文事ある者は必ず武備なかるべからざるを主張したるなどは、弱年にも似ざる達眼である。二十八歳進士となり勅命に依つて邊務八事を奏し、邊境の守備に關して極言剴切、能く時勢を洞察してゐる。既にして州務主事を授けられたのであるが、三十一歳以後専ら聖賢の學を修めた。彼が半生の經歷は彼れの自記に依つて明である。曰く『初めは任侠に溺れ、再び騎射に溺れ、三たび詞章に溺れ、四たび神仙に溺れ、五たび佛民に溺れ、正徳丙寅の始め、聖賢の學に歸正す』と。之より先き兵部主事たるの時、時事を慨して諫疏を上り、權臣劉瑾の爲めに獄に投せられ、尋で貴州龍場に貶せられ

叢棘の中に猛虎の難に遭ひ、瘴癘の氣に觸れて不治の病を求め、窮居二年、心を死生に繋かず、専ら格物致知の工夫を凝らし、斯くて豁然大悟の境に入り『良知』の二字を拈得して其の根源を探るを努め、知行合一の主義に立ち、靜坐鍛念の工夫を運らしたのである。既にして劉瑾罪せられ、瑾の爲めに殃を被る者皆免されて、陽明も爲めに江西盧隆縣知事に擧げられ、更に南京刑部四川主事に轉じ、累進して都察院左僉都御史に任じ、終に提督軍務となり、又た都密院右副御史に上り、屢次戦功を以て兵部尙書に陞叙せられたのであるが、陣中にあつても尙ほ講學を廢せず、戰鬪酣なるの間に處して『良知』の工夫修養を怠らず、人に書を與へて曰ふには『山中の賊は破り易く、心中の

賊は破り難し。區々たる鼠竊を剪除するは何ぞ異とするに足らむ。若し諸賢にして心腹の寇を掃蕩し、以て廓清の功を收めなば、此れ誠に丈夫が不世出の偉蹟なり」と。後更に特進光祿大夫となり、命を奉じて廣西の亂を平げ、終に病の爲めに官職を辭し、年五十七を以て卒した。陽明の一代は實に是れ吾等が修養の好模範、其の哲理は千歳の下長へに啓發の資たらざるはないのである。

蘇東坡の修養

支那四百餘州の山水は其の秀麗の氣を蜀に鍾めて詩人文豪を出し、先に李太白あり、後に蘇東坡あり、蘇東坡は蜀の眉州眉山縣に生れ、其の家は蜀江の上にあつて、山水の明媚は自づから偉人を生まざるを得ないのであるが、彼れ東坡は少年時代に於ては學を好まず、年二十七年にして始めて學に志した程の晩學であつた。併し偉人は何處までも偉人たるを失はず、其の學に志すや閑居六年、足門外に出でずして、六經百家の説を究め、後出でて京に入り、歐陽修に知られて秘書省校書郎となり、一代の文宗を以て天下に聞ゆるに至つた。常に莊子を読み、て心神の修養に資し、大に得る所があつたが、王安石の新法を行ふに及び、其の弊を論じて獄に下され、後赦されて黃州に貶せられて以來、田夫野人を友として、悠悠自適し、流離困頓の間に其の人格を陶冶し、詩思を鍊磨し、千古の絶唱たる赤壁の賦は、實に此の貶謫中の作である。之より先き京師にあるの時、禪僧の一喝を受けて禪學に志し、杭州に趣くや元禪師に參じて造詣する所深く年と共に益々悟道の妙

境に進み、後ち穎州の知縣となり、又た揚州に轉じ、召されて禮部尙書となりしも、遂に王安石の歿に罹るに至つたのであるが、一榮一枯轉變極りなき五十餘年の生涯、而かも二十七歳より學に志したる彼の生涯は、能く『忍』能く『勉』を以て一貫し、禪に依つて悟道を得、友情に厚く弟妹を親み、而かも其の文其の詩は、一言一句として修養の極致を論せざるものはない。故に吾等は文豪としての東坡以外に、更に偉大なる人格としての東坡を見るのである。北川温山が『東坡の學の文、浩然として博く、雜然として駁、荒々然として其の端倪を見ず、君子は期するに宰卿の器を以てし、儒者は許すに經緯の才を以てし、術士は擬するに權謀の離を以てし、佛氏は待つに解脱の祖を以て

し、道士、醫人、書畫者流、咸な吾曹の師と謂はざるはなし』と稱揚するものも亦た決して溢美の言ではない。英雄一たび起つて天下を救はんとするには、必ず深謀遠略がなければならぬ。能く人心を收攬して撥亂反正の功を樹てんとするには、必ず誠實慈仁でなければならぬ。事に當つて膽勇、難に遭ふて堅忍、厄に臨んで不撓、事を計るに明智、上下に對するに至徳なる、是れ英雄偉人の大なる所以で、高潔絶大なる人格の光輝は實に此等の諸點に存するのであるが、吾等は斯る人格を支那四百餘州に於て始めて諸葛孔明に見るのである。後漢の末天下三分して魏、吳、蜀に分れ、魏には曹操、吳には孫權、蜀には劉備あり、互に其の強を争ふの時、劉備未だ